竜の園

幻影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
竜の園

【Ｎコード】
Ｎ４８３９Ｎ

【作者名】
幻影

【あらすじ】
私は、いつも同じ夢を見る――――　異世界に迷い込んだ少女。竜が住み、不可思議な力のある世界。そんな世界で【巫女姫】と呼ばれる。　――――我らが巫女姫。貴女がそう望むなら。
初心者の下手な文章です。不定期更新。甘いか残酷かギャグかシリアスかは作者の気分しだい。残酷な描写～は今の所保険です。

1　夢の目覚め（前書き）

初心者な作者ですが、頑張りますので宜しくお願いします。
書くより読む方が好きかも。

1　夢の目覚め

私は、いつも同じ夢を見る。

森が広がっていて、海は澄んでいて、空は青い。
現代の日本では見られない、美しい自然。
まるで異世界。
そんな場所を見ていて、そして、不意に視点は変わる。

周りは村。ただし、崩壊している。
何故か炎に包まれていて、空には黒雲が広がる。
逃げ惑う人々。それを、私はただ見ている。
突如風が唸り、黒い何かに包まれる。
黒い、霧のような、暗闇に。
闇としか言えないそれに飲み込まれ、目は覚める。

「はずなのに……」

目は覚めた、はずだ。
いつもの夢を見ていて、いつものように目が覚めた。
いつもと違う所といえば、最後に声が聞こえたような気がする。
気がするだけかもしれないけど。

何故私がこんなに混乱していて、奇妙な自問自答をしているかといえば、目の前の光景の所為だ。
目の前に広がるのは、現代の日本では有り得ない、森。
周りは、木、樹。
しかも、樹齢何年だよ、っていうか何の種類？　なやつばっかり。
私、寝てたよね？
夢、にしてはリアル。
私が見る夢は、現実感の無いものばかり。あの夢でさえ、あんなにも鮮明な映像だろうが夢心地。
まるでテレビを見ているようなのに、これは違う。

自分が倒れていた、というか寝ていた地面を触る。
これまた何の品種？　新種？　な雑草が一面に生え、触り心地はふわふわ。
掛け布団みたいな感じ。押してもしなれることは無く、また起き上がる。
ふわっふわだー♪
ぽむぽむ、押して遊ぶ。夢の中なので柄に無くハイテンション。
普段は現実主義、他人の夢をばっさり切り捨てていく。
好きな言葉は「因果応報」とか「自業自得」等々。

「で、いつになったらこの夢は覚めるのかな？」

夢だと自覚する夢も始めてだ。
というより、こんなしっかりした夢は始めて。
いつもはストーリーも何も無い、滅茶苦茶なものなのに、これはただ森の中にいるだけ。
まあ、変な植物たちだけど。

数分経って、目も覚めないし、何も起こらないから移動し始めた。
どれだけ歩いても、辺りにあるのは木だけ。
この景色にも飽きてきた。

「普通、登場人物とか無いわけ？」

誰もいない。自分だけ。
その事実が、少しだけ寂しくて、とても穏やかだった。
聞こえる音は、自分が発するものと、ときおり風が葉を揺らすもの、小鳥のさえずりだけ。
どこまでも穏やかで、とても孤独な夢。
この夢は始めてばかりだな、と思った。

……とはいえ、こんなに歩いても何も無いって、どうよ？
歩くこと、数分を越え、数十分も越え、数時間。
真上にあった太陽が、さようなら状態。
赤い夕日が地平線の彼方へ。
代わりに、月が二つもこんにちは。
普通の白っぽい三日月と、薄紅の半月。

うわー、メルヘン。使い方合ってるかな？

「月が二つ、ねぇ？　太陽は一つなのに」

小鳥たちも数が減り、暗い静寂が広がる中に、ぽつりと一言。
さぁ、と風が草の間を駆けた。

えー、いつになったら目が覚めるのやら。

1　夢の目覚め（後書き）

見切り発車、という言葉が浮かんできます。
作者はまだ義務教育の身で、しかも勉強は苦手。しかも短気なので
いつまで持つか、いつ終わってしまうかわかりませんが宜しくお願
いします。

2　常闇の中で

果てが無い、というのは、このこと。
日は完全に落ち、空には二つの月と星々のみ。
目が覚める様子は無く、逆に眠い。
夢とはいえ、外で寝るには抵抗がある、現在っ子です。別名へたれ。
でも、睡魔には勝てないです。
幸い風は暖かく、気候は春、もしくは初夏。
近くの大木の根元にもたれかかる。

本当に、何の種類なんだろう。
大木の根はがさがさしていない。強いて言えば、硬いものに毛布を掛けたような、表面だけふわふわ。
奇妙。だけど、眠い。

「失礼します」

そのまま熟睡。お休みなさい。

暗い。
どこまでも暗く、黒い。
果てしない常闇の中、ぽつりと私はいた。
ふわふわとした、いつもの夢心地。
あまりにも不安定で、脆く儚い。
いつ崩れるかわからない、恐怖。

ああ、この夢は怖い。
どこが、と言われてもわからない。
けど、怖い。
闇が怖いのではなく、この闇がいつ終わるかわからないのが怖い。
いつか終わると知っていて、でもいつ終わるのかはわからない。
不安。恐怖。怯え。
どうして、こんなにも終わりが来ることが怖いのか。

『――ひ……。み……ぁ――――』

壊れる。崩れる。――――終わる。
夢が、覚める。

『迎えに……。巫女――――』

どこかから聞こえる声を合図に、闇が終わった。

「ん……？」

ふわりと暖かな風と共に光が目に差し込む。
そっと目を開くと、いつの間にか日が地平線の端に見えた。
木々の合間から光が零れる。
体を起こし、身なりを整える。
服は、制服。学校指定の、古風なセーラー服。
そういえば、何故パジャマじゃないの？
よく考えると、まだ夢の中だし。

怖い夢を見た、気がする。
基本的に、夢は覚えてないんだよね、あの夢以外は。
何となく、良かったなぁ、とか、怖かった、とか。

「気のせい。夢は幻想」

怖い夢を見る時は、何故か体調が悪い時。
けど、今は大丈夫みたい。
唯一自慢の長い黒髪を結い直し、歩き始める。

これ、ちゃんと夢オチ？

2　常闇の中で（後書き）

突然ですが、私は後書きが大好きです。
好きな作品に後書きが長〜く書いてあると得した気分になります。
というわけで、おそらく自分も長々と書いてしまうと思いますが、
大体の場合は読まなくても大丈夫です。
たまに、本編にも関わっているかもしれませんが。

今回はこの辺りで。
見てくださってありがとうございます！

3　出会いは唐突（前書き）

ようやく人が登場。

3　出会いは唐突

何か、夢じゃないような気がしてきた、今日この頃。
夢にしては長すぎる。
それに、太陽は真上。
いい加減疲れたし、その前に誰かいないのか？
果てしなく続く森。無人。

「はぁ……」

どちらにしろ、人がいないのは困る。
何故って？　空腹だからだよっ！
丸一日と、数時間を歩き、何も食べてない。
限界です！　衣食住は必須だよ！？
このまま彷徨ってたら、いつの間にか幽霊になってそう。

王子様、なんて幻想は生憎持ち合わせていない。
ただ、人間、プリーズ！
……もしかして、化け物という選択肢も？
いらないよ、その選択肢！

グルルルル……

……どこかから、唸り声が。
しかも、犬とか、そういうレベルじゃない。化け物とか、猛獣の。
選択肢、いらないってば！
どうしよう？　どこから聞こえたのかさっぱりなんだけど！！
下手に動いて、近づいちゃったら嫌だし、でも、どうしようもないし。
誰か、助けて。切実に！

「怯えているのか？」

普通怯えるだろっ！　って、え？

「これが巫女姫だとは、信じたくは無いな」

振り返る。
そこには、青年がいた。
王子じゃなくていい、と言ったけれど、青年はかなりのイケメン。
パニックな頭で説明すると、黒髪で、長さはかなり中途半端。
男にしては長く、って言っても、言うほど長くないけど。
ショートとセミロングの中間くらい。
瞳は見たことの無い紫色。
鮮やかで、綺麗。
でも、これでもか、ってほど目つき悪いから、台無し。

声は低く、こう、地を這うような感じ。
背は高く、百七十後半くらい。

「え？」
「……来い」

いきなり現れて、何で私の手を引くの！？
？まれた手首はかなり痛い。きつい。
しかも、無駄に長い足でかなり早く歩くから、足が縺れそう。

「ちょっと、何すんの！」
「黙れ。永遠にここを彷徨う気か？」

うっ、と言葉に詰まる。
それはご勘弁願いたいです。
必死に足を動かし、ついていく。
でもですね、日本人の体格をなめちゃ駄目ですね、やっぱり。
ずるっ、とこけた。前に。イコール、イケメン君に。

「ひゃあっ！？」
「！？」

反射的に背中に抱きつく。
あぅ。恥ずかし……！

案の定、上から降ってくるのは、鋭い視線。
元から目つき悪いのに、さらに細められてる。
冷や汗気味で、心臓が悪い意味で痛い。

「ご、ごめ――――」
「手のかかる奴」

言葉を遮られ、ひょい、と担がれる。
しかしですね、私は、俵担ぎとか、背負って欲しかったよ。
横抱き、俗に言うお姫様抱っこは恋愛経験ゼロの私にはきつすぎる……
青年は無表情、もしくは機嫌の悪い顔。
歩くスピードは変わらず、あたふたとする私を完全無視。

「お前が傷つくと我が困る」

平然とそんなこと言われてもっ！？

誰でしょう。この人。

3　出会いは唐突（後書き）

きゃー！
自分でもこの登場の仕方は納得してなかったり。
う～ん。青年視点も書く必要があるのか？

さて、ここからは全く関係ない話が始まります。
というよりも、私の中での永遠の謎その一です。
……どこからがグロいんでしょう？
友人に聞くと「血が出た時点で」と言うのですが、殴るシーンはグロくないらしいのです。
じゃあ、どこから？　謎です。

ちなみに、作者はグロいことで有名な彩辻行人著、殺人鬼を食事中に無表情で読めるほどにはスプラッターもの平気です。

4　思考回路停止

あれから少し経ち、青年は道がわかっているのかどうなのか、まったく止まらずに歩き続ける。
声を掛ける気にもなれず、どうしようもなく、終始無言。
どうすればいいのかな、この重い空気。

そんなことを思っていると、少し森が開けてきた。
日は暮れそうだけど、森から出れそう！
少し笑うと、青年がじっ、と見てくる。

「……迎えが遅くなったのは、悪かった」
「は？」

迎え、とは？
そんな予定あったの？
ぽかんとしていると、青年は視線を逸らした。
威圧感に、何も聞けない。
きゅるるるるる

「「……」」

ああ、何で鳴るんだ、私のお腹……
青年は無言。
痛い視線。

「……この辺りにお前の欲する物は無いぞ」
「生理現象ですっ！！」

きっ、と睨み付ける。
こういう時は無視していいのに！
青年は呆れ顔で、溜め息を吐く。
もう、どうにでもなれ。

「仕方ない。待っていろ」

ひょい、と地面に私を下ろし、どこかに行く。
え、と思っている間に姿は見えなくなった。
足速……

待つこと数分。
青年は戻ってきた。
手には、……描写を放棄したくなるような果実もどき。
色とか、形とか、もう有り得ないよ！
うっ、と息を呑むと、青年は顔を顰めた。

「味は保障する」
「そういう問題じゃないよ、これは、さすがに」
「我は好かんが、お前は平気だろう」
「いやいやいや、自分は違って、私はいいって何！？」
「黙って食え」
「嫌だよ、え、ちょっ！！」

青年は大きさ的には林檎ほどのそれをかじった。
びくっ、とする私に近づく。
そのまま、口を近づけて———

「……」
「味は？　不味いか？」

思考回路がショートしてますよ。
あのですね、味云々とかじゃなくて、何この展開。
青年～？　お前の感覚はおかしいぞ～？
お前は嫌いなものを食べない子供に口移しで食わせるのかっ！！

そこまで思い至って、かあっ、と顔が熱くなった。
始めてがこれってどうなのよ！？

「？　どうした？」
「……っんの———」

素で不思議そうな顔をする青年を睨み付けて、大きく息を吸う。
そして、

「阿呆ーーーーーっ！！」

叫んだ。

あれだよね。お決まりの展開。

4　思考回路停止（後書き）

きゃー（棒読み）
何故にこんな展開に？　な話です。
作者はこういう場面が本当に嫌いです。無理です。
読む分にはいいんですけど、書くの嫌です。
というより、この二人がするのが嫌なのかも。
これからは甘い展開はほぼなしですので。今の内に。
……続きにシリアスが増えそう。

夏休みが終わってしまったーーー！！
はい、関係ないです。
もう、３１日は死にそうでした。
いや、１２時には終わりましたけど。宿題。
友人は寝てなかったそうです。
実を言うと明日も実力テストなんですけど、もういいです。
もう、諦めましたから……（遠い目）
英語だけは壊滅的に無理なんですよ～！

では、今日はこの辺りで。
体育大会やら文化発表会やらで忙しくなるので、あまり来れないかも、です。
これからはだいたい週末更新になると思います。
それでは、乱文失礼いたしました。

5　眠りの間に

悲しいかな、ファーストキスは顔だけはいい人に取られちゃったよ。
本人は反省の色無し。
寧ろ、何故怒っているのかわからない様子。

「いい加減機嫌を直したらどうだ？　日が暮れている」
「うるさいっ！　最悪……」

本人が無自覚のため、怒りをどこへぶつければいいのか。
はあ、と大きな溜め息を吐く。
青年は無表情で無言。

「……我はここで夜を過ごそうが構わんが、お前はいいのか？」
「いいよ、どうでも！」

うわぁ。我ながらヒステリック。
青年は諦めたのか、腰を下ろして樹にもたれかかった。
目を閉じることはなく、ただ私を凝視。

じっ、と私を見る。
その間も無表情で、視線が痛い。
そのままも嫌なので、青年から少し離れた樹の根に座り込む。
俯いて沈黙。
風も無く、完全な静寂が広がる。

……やっぱり、人は睡魔には勝てないみたいですね。
重い雰囲気の中、こくり、こくり、と頭が落ちる。
体育座りをして、足に頭を乗せた。
すっ、と闇が広がるのがわかった。

すうすう、と寝息が聞こえてくる。
今は春。風邪は引かないだろうが、万が一引かれたら困る。
そっと抱きかかえる。
……目が覚めたら、また怒鳴られそうだ。
だが、風邪を引かれるほうが困る。
自分が嫌われようが憎まれようがいい。
自分は、そういう存在だからな。
終わりに生まれた、不吉な者。

明るい。
そっと目を開ける。
体を起こそうとする。けど、立てない。
何か、重くない？
無理矢理体をねじれさせて脱出。
……
何で隣で寝てるの！？

「ちょっ！？　何で抱きしめられてんのよっ！」

何故体をねじる必要があったかというと、後ろから抱きしめられる形になっていたからだった。
鋭い目が無いからか、怖くない。
って、そうじゃなくてっ！

「起きろーーーーっ！！　説明を要求するぅっ！！」
「……うるさい。無駄に声がでかいな」
「悪かったわね！　で、何であんたと一緒に寝てるの！？」

ぼー、とした顔をし、数秒沈黙してから、ああ、と無表情に戻った。

「風邪を引かれると困る」
「……はい？」
「だからだ。それ以外に何の理由がある？」

駄目だ。話が噛み合ってない。
呆然と座り込んでいたら、立ち上がった青年に、

「今日も野宿か？」

と言われた。
嫌だ、と立ち上がる。

この人の感性はおかしいんだ。きっとそう。
だから昨日もあんなことを———

思い出して赤面って、かなり恥ずかしいね。

5　眠りの間に（後書き）

別題、伏線その一。
何故か主人公以外の視点の方が書きやすいんですよね。
脇役視点の方が裏設定で埋め尽くせるし……
例外もありますけど。

ああ、体育大会の練習が始まってしまった……
全身筋肉痛です。あと二週間もこれが続くのか。
今もシップはりまくりですし。
去年よりもしんどいのは何故？
では、次も読んで頂けるよう頑張ります！

6　白き麗人

ようやく森の中から出れたよーっ！
生い茂っていた木々に隠されていた太陽が顔を出した。
辺りは石、岩、岩石。
山肌にそうように岩がごろごろ。
果てしなく、広がってます。

「あのさぁ、どこに向かってるの？」
「我らが園だ」
「えっと、具体的にお願いします」

すると、青年はうっとおしそうにこちらを振り返った。
機嫌が悪そうだ。

「向かっているのだ。行けばわかる」
「後どれくらいかかるの？」
「……ふん。仕方ない。叫ばず、？まっていろ」

何に？

そう言おうとした時、不意に突風が吹いた。
反射的に目を閉じる。
次に目を開けたとき、そこにいたのは竜だった。
西洋風の、大きな竜。
ゲームに出てきそうだな、と変な感想を持った。
漆黒の鱗に覆われて、紫の鋭い瞳をこちらに向けた。
えっと、これって、そういう夢？

『早くしろ。あまり長居はしたくない』
「どこに？まるのよ」

頭に直接響く、青年の声。
うん。スルーだ。深く突っ込まないほうがいい。
はあ、と溜め息が聞こえてきそうな雰囲気に、やっぱり青年だ、と思った。
見た目怖いけど、中身は全然なので近寄る。

『どこでも。落ちても自己責任にするからな、落ちないように工夫しろ』
「それって、どうなのよ……」

ぶつぶつ文句を言いながら、よじ登って安定する場所を探す。
？まる所が無いので、鱗と鱗の僅かな隙間に指を挟む。
青年はそれを確認してから、飛んだ。

羽ばたいたのは最初だけで、後は風に乗って、というか操ってない？　な感じ。
スピードのわりには風の抵抗も無い。
気を使っているのか、これが普通なのか。

「うわぁ」

景色は最高。
私たちがさっきいた森はとてつもなく広く、一度迷ったら一生出れないだろう。
青年がいてよかった、と思ったのは内緒。
近くには海が広がっていて、太陽の光を反射してきらきらと光っていた。
けど、かなりの高さなので凝視はつらい。
感覚が麻痺して、落ちそうなので見るのはやめた。

そうして少し経って、降りていく感覚になった。
そっと下を見ると、山。
大きな、上空からでもそれが圧倒的な大きさだとわかる大木が一本あり、青年はその下に向かっているらしかった。

「ここ？」
『ああ。入り口だ。……あいつか……』
「誰？」
『すぐにわかる』

またそれか、と思いながら、地面についた。
一度ぶわっ、と下から風が来て、落ちそうになった。
ゆっくりと青年の背から降りる。

大きな大木。
日本の世界遺産の樹なんか比べ物にならないくらい巨大。
ビルがすっぽり入りそうなくらいの大きさ。
そんな樹を見上げる。

「お待ちしておりました。我らが巫女姫」

不意に、声を掛けられる。
綺麗な声だと思いながら、振り返った。

白い髪は歳からでなく、天然のものだとわかる美しさ。
瞳は宝石のような翠。
中性的な顔立ちで、微笑んでいた。

「え……」
「はじめまして、の方が適切でしたか？　姫」

その微笑みは、反則だと思うよ。

6　白き麗人（後書き）

ようやく竜、ようやく他の人ですよ！
実は青年よりも白い美人さんの方が書きやすかったり。
週末ではありませんけど、気分転換に。
……宿題は知りませんよっ！
英語なんて意味不明なんです。仕方ないんです。
実力テストが幾ら悪くても仕方ないんです！！

「だからといって約八割を白紙で出すのはどうかと思うが？」

こらそこっ！　青年っ！？
暴露をしない！！
ってか何であんたがここにいるんだ！？

「黙れ。自分で書いているくせによく――――」

はい！！　以上、ゲスト青年でお送りしましたー（棒読み）

「……何も言うまい」

7　異世界の入り口

白い美人さんに、言葉も出ず硬直。
不思議そうに私の顔を覗き込む美人さん。
いや、青年もイケメンだったよ？　でも、目つき悪いし、不良っぽいし……
この人は完璧だった。
麗人、って、こういう人を言うんだ、と思う。

「姫？　どうかしましたか？」
「離れろ。白竜」

ぼー、としていた私の後ろに、青年が立っていた。
その声で我を取り戻す。

「あ。はじめまして」
「ええ、はじめまして。姫」
「……我の時と態度が違うだろう。何回叫ばれたことか……」
「それはあんたが変なことをするからっ！」
「……仲がいいですね、黒竜」

にこにこ。
そんな風に笑う美人さんなのに、何か怖いです。

「やはり、私が迎えに行くべきでしたか？」
「ふん。誰が行こうと同じだ」
「そんなことはありません。貴方ほど無愛想で礼儀の無い者は少ないですし」
「お前ほど腹が黒い奴もいないだろうな」

ああ、恐ろし。
にこにこと笑う美人さんも、睨み付ける青年も、かなり怖い。
というか、私を挟んで喧嘩はやめて欲しい。

「ああ。姫。気分を害しましたか？」
「……やっぱり、姫って私のこと？」
「もちろんです。巫女姫は貴女以外にいませんよ？」

美人さんは気付いてくれて普通の微笑みだけど、青年は未だに不機嫌そう。
こちらに、と言う美人さんについていくと、更に不機嫌になった。
いや、怖いから離れたいんだよ？　あんたの所為だよ？

ついて行くと、そこは樹の空洞部分。
大きな根にぽっかりと穴が開いていた。
どうなっているのかさっぱりだけど、机や椅子が置いてあり、どうぞ、と美人さんが椅子を引いてくれた。
美人さんは向かいに座って、青年は壁にもたれかかっている。

「質問があるでしょう？　答えます」

当然のように、美人さんは言った。
薄々、というか、完全に気付いてたけど、やっぱり夢じゃなさそう。
はあ、と溜め息を吐いてから、美人さんを見た。

「ここ、どこですか？」
「この世界の名でしたら、【エレウテリアー】。……我らが竜であることは、お気づきですね？」

まあ、薄々ね。
だって、青年は漆黒の竜になったし、黒竜、白竜って呼んでたし。
こくり、と頷いた。

「じゃあ、次。何で私はここにいるの？」
「簡単な回答としては、貴女が巫女姫だからですが、それでは意味がわかりませんよね。巫女姫は、我らの統治者。我らは大きな力を

持ちますが、人のような感情が無いのです。人の複雑な感情が無いため、本能のままに生きます。ですが、それはあまりにも危険です」

ふ、と一瞬哀しそうに笑った。
言葉を区切り、話す。
青年は黙って聞いている。

「そうですね、悪い例では、世界を滅ぼしかけた邪竜もいます」
「それって……？」
「我らの中には、それほどの力を持つ者もいるのです。例えば、そこの黒竜」

美人さんの目線は青年に。
って、え！？
ふん、と顔を顰める青年には、とてもじゃないがそんな脅威は見られない。
普通の、ちょっと顔がいい青年。

「竜は色によって大体のことはわかるのですが、黒竜は破滅を呼ぶとされる者」
「あの邪竜は黒竜ではないぞ」
「ええ。まあ、そういうわけでして、とても野放しに出来るような種族ではないのです」

にこにこと笑いながら話す内容ではないと思う。

え。でも、巫女姫って……

7　異世界の入り口（後書き）

別題、伏線その二。
白い美人さんに注目、です。
ネタバレですが、美人さんがこの物語の重大な鍵を握ってるんですよ。
今の所。多分。設定上は。
このまま物語が進めば、ですけどね～。

とりあえず皆の呼び名を早く出したい。
流石にいつまでも「青年」やら「白い美人さん」は、ねぇ？
ちなみに、作者は主人公を「姫」と呼んでます。
そして、腹黒なキャラは大好きです。
腹黒で策士で笑ってたら最高！！
そんな作者の要望で生まれた白い美人さんなのでした～
青年よりも白い美人さんの方が書きやすいのはその所為ですね。
……だから、番外編を書こうとしたら美人さん視点になるんですね。
というわけで、また今度白い美人さん視点の番外が出る、かも。
明日元気なら。部活で倒れてなければ。一日練習キツイ。

8　強制執行

野放しって、言い方どうなの？
自分もその竜なのに。

「ですから、巫女姫が必要なのです。だからこそ、貴女をここに連れてきました」
「無理っ！　私、そんなの……」
「いいえ。それが出来るから、貴女はここにいる」

翠の瞳が覗き込む。
選択肢など無い、と。

「我らが巫女姫。貴女は、我らの枷（かせ）となり、我らを縛り付ける。その代わり、我らは貴女の僕（しもべ）です。貴女が望むなら、何でもして差し上げます」
「そんなのいらないっ！　私は――――」
「ここへ連れてこられた時点で、お前に選択の自由は無い。諦めろ。お前の居場所はここしかない。帰る場所など、無い」

どろり、と恐怖が身に沁みる。
これは命令だった。
元の世界には帰してやらない、と。
圧倒的強者の、命令。

「……どうしろって言うの？　私に出来ることなんて無いよ？」
「いるだけでいい。竜は、お前に従うだろう。我を含めて」
「姫。巫女姫とは、竜に好かれる者です。貴女が望まなくとも」

にこにこ。
満足そうに、白き竜は笑う。
もうどうにでもなれ、だ。
帰れなくても、生きていけるさ！
そう。哀しかろうと、嘆こうと、時は流れるし、全ては変わる。
私がいなくても。
私の影響力なんてそんなものだ。

「あんた、従ってる？」
「我はお前を好いていない。巫女姫など、もはや伝説上の存在だ。真実かどうかも怪しい」
「これは、どうなの？」

美人さんに聞く。
美人さんはずっと笑ってる。
けど、一瞬、それが嘲笑になった。

「そうですか？　貴方にしては、従順じゃないですか。好意が無いわけが無い」
「これで？」
「ええ。それに、私は姫のことが好きですよ？」

さらっとそういう赤面ものな発言はやめて欲しいです。切実に！
やっぱり、竜って感覚おかしい。
青年も不機嫌そう。

「……二度と口が利けんようにしてやろうか？」
「ふふふ。出来るんですか？　貴方のような若造に」

うわー。また修羅場ー。
喧嘩はやめて欲しい。
しかも、この二人の場合、規模が半端じゃない。
いろいろ崩壊しそう。
どす黒いオーラが見える気がする。

「やめてよ。喧嘩は私に影響しないように、隠れてして」
「中心にいるのは姫ですよ？」
「じゃあ、喧嘩はしない方向で」
「……っち」

舌打ちが後ろから聞こえたが、無視。

いちいち構っていたら、きりが無い。
それに、青年は怒りっぽいし。

「わかりました。姫がそう言うのなら」
「仕方ない」

それでも一応は言うことを聞いてくれるみたい。
でも、

「だが、こいつと仲良くするつもりは無いぞ」
「ええ。それには賛成します」

……一応、みたいだ。

ああ、こんなんでやっていけるの？

8　強制執行（後書き）

ノリだけで書きました。流れがおかしいのはご愛嬌。
「げぼく」より「しもべ」の方が響き的に好きです。

ようやく話が落ち着きました。
とりあえず、一番重要なのはこの辺りのはず。
……名前は、次です。番外編を挟んで、名前です。
いい加減「青年」は酷いと思ってきた……
次回の番外編は白竜視点、別題、伏線その三です。
っていうか、白竜が出てくる時点で伏線は確定しているらしいですね。
書けるのは書けるけど、伏線にしかならない。何故？

8－9　終焉へと（前書き）

白竜視点の番外編です。
短いのは、これ以上書くとネタバレになるからですね。多分。

8―9　終焉へと

ようやく、ようやくだ。
もう少しで、長年の願いが叶うのだ。
【彼】の、願いが。

このためだけに、準備をしてきた。
巫女姫の訪れにより、ようやくその準備が終わったのだ。
そう。私のすべきことは。
後は【彼】と巫女姫に委ねる。
巫女姫が【彼】に気付いた時、全ては終わるのだ。
だから、あと少し。
私の役目が終わるまで、あと少し。
――――そう。もう少しだけ。

「……ようやく、全てが終わります。そうすれば、貴方も、あの方も幸せになれるのでしょう？　私が背負うものを、捨てれるのでしょう？　ねえ、――――」

【彼】の名を告げ、そして想う。
あまりにも残酷な、それでいて純粋な【彼】。
だからこそ私がいて、あの方は不幸になった。

それを終わらせる。終焉まではあと少し。

そう。もう少しで、【彼】は終わりを告げるのでしょう。

8―9　終焉へと（後書き）

別題、伏線その三。
というわけで、白竜視点なのでした～
うん。やっぱり一番書きやすい。
【彼】とは一体？　な話ですね。
白竜と【彼】との関係が明らかになるのはいつのことやら。

9　巫女姫の名付け親

「おはよ～」

黒と白の二人にあいさつする。
黒い青年は壁にもたれかかって、目を閉じている。
白い美人さんは椅子に座って、こちらを見てにこにこ笑っている。

「おはようございます。眠れましたか？」
「うん。……私って、図々しいんだなぁ、と実感してるよ」

あの後、奥の部屋にあるベッドを借りて寝た。
どうもこの樹は廊下がいっぱいあって、部屋もたくさんあるらしい。
寝室も階段を上った所にあった。
そして、何故か地下には行かないように、とのこと。
今度説明してね、と言ったら、またお暇な時にでも、と言われた。

「そんなことはありません。慣れていただける方が、私も嬉しいです」

満面の笑顔で言われる。
いや、自分としては帰れなかったりするから、もっとショックだと思ってたけど……
自分は結構薄情だ。

「そういえばさ、貴方たちの名前は何なの？」

ずっと疑問だった。
言ってくれるかな？　と思いつつも、言ってくれないので自分で聞く。
すると、何故か美人さんはきょとんとした顔をした。
青年も溜め息を吐く。

「ああ、私たちには名前が無いのです」
「へ？」
「我らにとって名とは、束縛するものであり、祝福するものだ。我らを束縛するほどの者もいなければ、我らを祝福しようという物好きもいない」

目を閉じたままいきなり言う。
びっくりするじゃないか。

「我らは人と関わることが極端に少ないですから。親しい者もいな

いのですよ」

苦笑いで言う、美人さん。
それは哀しいと思う。
名前は、自分が自分である証であり、自分という存在を定めるものだと思うから。
私だったら、自分がわからなくなりそうで、怖い。

「……私じゃ、駄目？」
「何がですか？」
「名付け親。ほら、名付け親は特別だって言うし。そんな童話もあるし」

すると、二人は驚いた顔をした。
そして、青年は顔を顰め、美人さんはにっこりと笑う。

「姫がそう言ってくれるなんて、とても嬉しいです」
「貴方は？」
「……お前が望むなら、勝手にしろ」

軽いなぁ、青年。
名前って大事だと思うよ？

「えっとね、じゃあ……」

名前には意味がいるよなぁ。
う〜ん、とうなってから、言う。

「じゃあね、紫苑（しおん）と銀（しろがね）」
「シオン？」
「シロガネ、ですか？」

やっちゃいけないけど、指を指す。
紫苑は、青年。
銀は、美人さん。

「紫苑って言うのは、紫色の綺麗な花の名前。ほら、目が紫だからさ。銀は、そのまま銀色。銀みたいな白、だからいいかなって。髪が綺麗だからね。」

言いながら、漢字を机に指で書いた。
漢字も好きだし、響きもいいし、意味もちゃんとあるし、いいかなぁ、と二人を見る。

「ありがとうございます」
「……」

青年は沈黙。
気に入らなかったかなぁ、と不安になる。
やっぱり、名前は大事だよね？

「あの――――」
「いや、いい。それでいい」

私の言葉を遮り、言う。
難しい顔をしているのは何で？
すると、美人さん、もとい銀が説明を入れてくれた。

「照れているだけですから、気にしなくても大丈夫ですよ」
「うるさいぞ、白竜」
「シロガネです」
「どちらでも構わん。黙れ」
「見苦しいですよ。認めなさい」
「お前は――――」

青年、もとい紫苑は切れそう。
眉を寄せ、ぎり、と歯軋りをしている。

もっと仲良くして欲しい、今日この頃。

9　巫女姫の名付け親（後書き）

ようやく名前が登場！
名前は色からです。見たらわかると思いますけど。
黒竜が紫苑とは最初から決まっていたんですが、白竜はかなり悩みました。
題名はグリムの「死神の名付け親」から。
つけてる方が先なんですね。

今週末は体育大会やら何やらで忙しいのでかなり早めです。
とりあえず発売されるゲームを頑張ろう！
F〇もしたいけどポケ〇ンが先だよね～。久しぶりに聖剣〇説とかス〇ーオーシャンとかもしたいよね～。
はい。勉強は苦手です！

10　赤い乱入者

私の目の前には、美女がいた。
燃え上がるような赤い髪は炎の色で、腰よりも長かった。
黒と赤のゴスロリ風の服を着ている。
ふふふ……、とどこか恐ろしい笑みを浮かべている。

「あら。お姫様がいたのね。可愛らしい」
「えっと、あの……？」
「はじめまして、かしらね？　竜たちのお姫様」

狂気的な笑みを浮かべて、その美女は嗤(わら)う。
ぞくり、と背を悪寒が駆け上がった。

「炎竜。黙れ」

背後から紫苑の声が聞こえ、空気が不機嫌な威圧感に変わった。
振り向くと、案の定紫苑は顔を顰めて立っていた。
負のオーラが見える……

「ふふふ。つれないわね。お姫様をひとりじめなんて」
「黙れと言っている」
「でも、そうね。愛しい子だもの。檻に閉じ込めてしまいたいでしょう？」
「黙れと言っているのが聞こえんのか」

紫苑の機嫌が急降下していく中で、美女はくすくすと笑っている。
内容よりも、この心臓に悪すぎる雰囲気がつらい。

「炎竜。我らが巫女姫に何をしているんですか」
「心外だわ。私は、忠告をしてあげているのよ。そう。忠告を。――竜の思いは、世界を壊す。知らないわけじゃあないわよねぇ？」

奥の部屋から出てきた銀に、美女は言う。
そして、その途端、銀と紫苑が黙り込んでしまった。
憤慨していたはずの紫苑さえ、ふん、と目線を逸らして沈黙。
意味がわからないんですけど。置いてかれてるよ～！

「あの～？　理解不能なんですけど～？」
「あら。ごめんなさいね？　私は炎竜」
「私は――――」

ふと、言葉につまる。
言うことは決まっているはずだ。自分の名前。

けれど、それが言えない。
頭の中には浮かんでいるのに、音として発せられない。

「姫。名前には、意味があるんです。名前がない、つまりは対等でない相手に貴女の名前は届きません。貴女の、巫女姫の名は重い」

理解不能。
名前の意味が重い、っていうのは、昨日言っていた祝福がどうたら、という意味だろう。
ただ、名前が届かないって、何？
意味がわからずに銀の顔を見る。

「その炎竜には名がありません。祝福も束縛もされていない不安定な存在に、巫女姫という大きな存在の名は知りえません」
「要は、名前があればいいの？」
「いえ、そういうわけではありませんが。しかし、名がある方がよろしいかと」
「いる？　名前」
「付けてくれるのかしら？　光栄だわ。巫女姫直々の命名」

やっぱり、軽いなぁ。
名前が重要なのか、どうでもいいのかわからない。
とりあえず、考える。

「じゃあ……、朱（あかね）は？」

「アカネ、かしら？」
「赤色の名前なんだけど。どう？」
「私たちは、貴女に否定の言葉なんて持っていないわ。ありがとう」

くすくす笑いながら言うので、いいのかなぁ、と思いながらも本人がいいって言ってるからいいか、と納得。
美女、もとい朱は自分を睨み付ける紫苑をちらりと見てから、部屋から出ようとする。

「お姫様の騎士が怒っているみたいだから、今日は帰るわ。さようなら」
「うん。じゃあね」

竜って、皆顔いいのかなぁ？

１０　赤い乱入者（後書き）

こんなはずではなかった。
いや、読んでいた小説の影響を受けてこんなキャラが誕生したのは確かなんですけど、ちょっと、流石に……
ちなみに、朱が一番年長者です。
紫苑が一番幼いんですけど、そこは竜。年齢は外見に反映しません。
朱の歳は永遠の謎になるんでしょう。美女に年齢は聞いちゃいけません。

遅いですね、更新が。
忙しいんですよ。体育大会は終わりましたけど、次は文化発表会ですし。
何よりポケ〇ンを終わらせなければ……

11　圧倒的強者

「――死ね」
「そういうわけにはいきませんよ？」

ああ。またもや修羅場……

朱が帰ってから、何故か口論になり、喧嘩。
樹の外に出てきている。
しかも、やっぱり異世界。魔法みたいなものは存在するらしい。
まあ、つまり。

「もうっ！　二人の喧嘩が終わる前に私が死んじゃうよ！！」

火の玉は飛んでくるわ、氷の塊は落ちてくるわ、目の前の雑草が風で真っ二つに切れるわ、地面は割れるわ、いつ流れ弾を食らうかわからない状況。
しかも、それが掠っただけでも重症な規模。
もう嫌だ。

「黒竜ともあろう者が、無様ですね。私に言わせれば、優しさは臆病と同等です」
「黙れ。忌まわしい呪われた血を引く愚か者め」
「それは否定しませんが」

内容に突っ込む暇も無い。
とりあえず、樹の中に非難するために走る。
こんなことで死にたくない！

「ですが、それは強大な力を持っているが故。貴方も同じはずでしょう？」
「……使い方は誤らん」
「どうでしょう？　未来のことは断言出来ませんよ？」

喋るなら火花を飛ばすな！！
喧嘩はするなって、巻き込むなって言ったのに！

「あーーーっ！　もうっ！！　いい加減にしろーーーーーーーーーー！！！」
「「？」」

ふと止まり、こちらを見る二人。
きょとん、とするなっ！　こっちは命がけだったんだぞ！
もしかして、気付いてなかったわけ？

「……平気か？」
「やっぱり、気付いてなかったの……」
「申し訳ありません。あまりにも紫苑が目障りだったので」
「黙れ」

……最近、銀が腹黒だって気付いてきたよ。
紫苑はツンデレだよね。言ったらかなり怒られそうだけど。
腹黒い人は敵に回しちゃ駄目なんだよね。
でもなぁ、紫苑も怖いしなぁ。

「ほらほら。二人とも喧嘩しないの。……本気で死ぬかと思ったんだから」
「すまん」
「死なせませんよ。たとえ身体が半分なくても再生できますし」
「えっ！？　グロ……。私としては、そうなる前に助けて欲しいよ？」
「貴女に当たるようなことはありえません」

何で断言できるんだ？
というより、竜って凄いな。身体が半分……
……
考えるのはやめようか。

「まあ、そこまで他者を治癒できるのは私のような白竜くらいですが」

「ふん。その力の所為で苦しむ者の方が多いがな」
「力を求める愚か者がいるからでしょう？」
「あのね、私に理解不能な話は他所でしてよ」

ああ、竜って何者？

理解出来る日は、多分こない。

11　圧倒的強者（後書き）

何故か竜の喧嘩話しに。
黒竜はもちろん白竜のことが嫌いです。白竜はどうでもいいらしいですけど。
何で前の流れでこんな話になったのやら。
竜は自己中が多いらしいですね。

黒竜をもっと目立たせたいのに、何で白竜ばっかりべらべらと喋るんだろう。

12　人の国へ

「――人間ですか？　いますよ、勿論」

竜しか見てないから、他はいないのかと思ったら、いるらしい。
ただ、やっぱり竜は特別みたい。

「我らがあまり多種族と関わることを好みませんから。現在の帝国はどうなっているのでしょうね」
「国は一個しかないの？」
「いえ。人間は常に争い、各自で国を作っています。帝国は一番大きい人の国です」

何か、格下です、と聞こえてきそう。

ちなみに、今現在ここには紫苑はいない。
どこかに消えました。銀に聞いたら、「さあ。どうでもいいことは知りませんね」なんて言われちゃったよ。怖い。
心配はしてないし、いつか帰ってくるだろう、と割り切ってる。

「邪竜が暴れまわってからは、人間たちは休戦しているようですね。うるさくなくていいことです」
「休戦ってことは、またするんだよね。嫌だなぁ。せめて私が死ぬまではして欲しくないな」
「争いはお嫌いですか？」
「そりゃあ無い方がいいでしょ？　まったくない、なんてありえないだろうけどさぁ……」

人は、何かを思う限り、必ず他人とずれが起こる。
そこに争いが生まれる。
何も思わないなんて不可能だから、争いも消えない。
悲しいことだけど、仕方ないことでもある。
……私は悲観的だ。

「……そうですか。お優しいのですね」

何故だかとても哀しそうで、私は何も言わなかった。
何を思っているかは、わからないから。

「あ。それじゃあ、私見たいな」
「何をですか？」
「人間。だって、私人間だし」

少し、竜とは感覚が合わない。
嫌ではないけど、やっぱり同じの方がいい。

違う世界だけど、同じところがあるかもしれない。

「……人間ですか」
「ダメ？」
「いえ。――――我らが巫女姫。貴女がそう望むなら」

にっこりと、笑ってそう言った。
私もつられて笑顔になるのは、仕方ないこと。

「うわぁ！！」

ただいま空の旅中。
白い竜の背中に乗って、空を飛んでる！
ちなみに、銀は鱗じゃなくて毛。
ふさふさで気持ちいい。
形は西洋風。
景色は最高で、銀が私のことを気遣ってくれてるから、乗り心地も最高！

『平気ですか？』
「うん！　凄いね！」

少しして、大きな国が見えてくる。
黒い、大きなお城に、城下町らしき家々。
ここが帝国だ、とすぐにわかる。
銀は近くの森に降りた。

楽しみが壊れませんように。

１２　人の国へ（後書き）

あれ？　何で銀が出てるのに紫苑がいないの？
いや、私が悪いんですけど。黒竜は書きにくいんですよね～
大丈夫、いつか黒竜の方が出てくるから！　……多分。

一応これから三話くらいは【帝国】のお話です。
大きな国は三つあるんだよ、とか、皇子は恐ろしいんだよ、とかはまた後ほど。
キャラだけは出来てるけど、話が追いついていないという悲劇。
次の後書きには人物紹介を載せれればいいなぁ、と思考中です。

13　黒き門より

頑丈そうな、大きな門。
黒光りするそれは、まさに帝国らしいもの。

「凄いね！　こんなのはじめて見たよ！」

後ろで銀は苦笑している。
門番らしき二人が何事かと出てくるのも気に留めない。
こちらの世界に来てから、何故かおかしくなった私。

「おい！　貴様ら、どこの国の者だ！」
「通行書の無い者は通さんぞ！」

あ。そういうのはしっかりしてるんだ。
二人の竜の所為で感覚がおかしくなっている。
どうしようかな、と思うと、銀が門番たちに近づいた。
真っ黒な鎧を纏った二人の騎士。
何か言っている。私には聞こえなかったけど、門番は顔色が青くなったから、気にしたら駄目な内容だろう。

どうなったのかな、と思っていると、大急ぎで門を開けたから入っていいの？と銀を見る。

「どうぞ。参りましょうか」

微笑んでそう言う。
私は喜んで中に入っていった。

「――――カルディア様」

ふと目をやると、部下がいた。
書類の整理中に、うっとおしいと思いながらも報告を聞く。
それが、仕事だからだ。

「何だ」
「申し上げます。白竜が幼い子供と共にこの国に入ったそうです」
「……それで、追跡は？」

「部下の一人を向かわせております。何でも、その子供は黒髪黒眼だそうで」
「どこに向かっている？」
「わかりません。城下町を歩いているようです」
「……後は頼んだぞ。」
「え？　お待ちください！　危険です――――」

「避けられてるね。何で？」
「恐らく、姫の容姿の所為かと。黒色は珍しいので」
「ふぅん」

町の中をぶらぶらと歩いているが、人は多いのに何故か自分の周りには誰もいない。
半径二メートルの円が出来ている。
自分が異質な存在であることはわかりきったことなので、こちらから近づこうとはしない。
どんな場所でも、異質なモノは恐ろしいのだ。
あれ？　でも、紫苑は黒色だよね？
竜は特別なのだろうか。

「私からしたら、皆茶色の方があれだけどなぁ」

周りの人々は皆茶髪。
前の世界では、鮮やか過ぎる色合いは、あまりお目にかかれない。
今では、鮮やかな色合いしかない。
まあ、周りが全員そうだから、たった一人の黒が目立つんだろうけど。
黒は嫌いじゃない。寧ろ好きだ。
黒は拒絶の色で、闇の色。本能的に嫌われる色。
私は、好き。それだけ。

「原色は元々珍しいのです。皆、何らかの色が混じっています」
「うん。綺麗だよね。さっき、グラデーションな色があってびっくりした」
「そうですね。あそこまで見事な色は珍しいです」

さっき見たのは、紫の髪の人。
足まである長い髪で、先の方が濃くて、根元が淡い、綺麗な色だった。
あんなのいいよね。
ふわふわと、辺りを見回す。

「――――竜か？」

ふと、後ろから声を掛けられた。

いい出会いは、あまりなかったような。

１３　黒き門より（後書き）

紫苑

黒竜。一匹狼で、口はかなり悪い。

黒髪紫眼。

竜の中では最も幼く、若造呼ばわりされるのが嫌い。

感覚が竜のものであるため、巫女姫とは噛み合っていない節も。

白竜が一番嫌い（本人談）。

というわけで、黒竜の紹介でしたー。

あんまり意味がないような気がしないこともないですが。

ちなみに、竜体のイメージはファイナルファ〇タジーのバ〇ムートです。

来週テスト、アンド部活の大会、というわけで早めの更新（遅いか）。

あ～。テスト勉強してない～。やば。

では、失礼いたします！

１４　青き人

最近、顔がいい人しか見てないなぁ、と思う。
振り返って、そこにいたのは男の人だった。
鮮やかな青の髪と、藍の瞳。
目つきは紫苑ほどではないけど、悪い。
何だか、威圧感を感じる、そんな人。

「お前は竜か、と。そう聞いているんだ。聞こえていないのか？」

むかっ。
何だか見下されている。
子供に見えるらしい。そんな気がする。
お～い。私は百六十はあるぞ！
ちびではない。寧ろ高い方だった。
なのに、何で子ども扱いなんだ？

「何よ、偉そうに。質問をするのに私は返事すらしていないじゃない」
「何だと？」
「要約すると、私は貴方の言うことを聞く義務が無い。だから無視」

明らかに挑発的な態度を取る。
結構、私は頑固で怒りっぽい。
青年の顔が歪むのがわかった。

「……なめるなよ、小娘」

チャキ、と鉄の音がする。
青年の手元には、剣があった。
うわぁ。銃刀法違反。

「――――銀！」

後ろに立っている。
いつの間に、なんて思わない。
だって、この状況が恐いもん。
そして、銀の方が怖いことを知っている。

「何をするつもりですか？　人間」
「お前は、白竜か？」
「ええ。それで？　どうしますか？」

怖い。

何か、黒いオーラ的なものが後ろに漂ってる。
ちなみに、振り返る勇気とか好奇心とかはない。

「何をしにきた。忌まわしい竜め」
「何もする気はありませんけれど、貴方の行動しだいでは、わかりませんね」
「あのね、あんまり心臓に悪い発言は控えてよ……」

心からの言葉だったのだが、銀はにっこりと笑いながら私を見下ろして、

「標的を間違えたり、加減できなかったらすみません」

こわっ！
言葉の裏に「殺してしまうかもしれません」なんて隠さないで欲しい！
いや、隠れていなければいいとか、そういう問題じゃないけど。
笑って言っているのがまた。

「……何をしに来た」
「えっと、別に、あの、その、え～」
「長い。さっさとしろ」
「口が悪いですね。死にたくなければ改めなさい」
「だからっ！　そういうの禁止！」

もう嫌だ。

１４　青き人（後書き）

テスト終わったぜ、イエーイ！
な感じです。ハイ。テンションおかしいのはご愛嬌、ということで。
謎の青年が何か黒竜と被ってる気がしますけど、ご愛嬌、ということで。

最近書けなくなっている、ヤバイ、という私のことはお構いなしに白竜が暴走しています。誰か彼を止めて！　話がこじれるのよ、アンタが出てくると！
と言いつつ、彼が一番書きやすいという罠。悲しい。
主人公の性格が初期と違うんじゃない？　と思ったりしますけど、その辺りは、まあ、多めに見てもらうということで。

次回は、ようやく出したかった二人組みが登場、なんですよ。
いや、竜が少ないなぁ、とか思いまして。
※予定は未定です！　私はこれを名言だと思います！
それでは、今日はこの辺りで。

（読んでる人いるのか？）

15　少年と少女

「――――要は、見学か？」
「そう、それ！」

何だかんだで何もしませんよ的な意思を伝えた。
かなり必死だ。後ろの腹黒な白竜さんが怖いので。

「……人間なのか？　お前は」
「人間だよ。寧ろこっちがびっくり。人間以外になんかある？」

心外だ。私が人間以外の何だというのだろう。
後ろの白竜さんと一緒にはされたくない。黒竜ともだけど。

「いや。黒髪は珍しいからだな」
「いるの？　黒い人」
「……そういう種族がある。黒き民と呼ばれているが。お前は違うのか？」
「違う違う。人間です」

そうか、と納得してくれたようなのでよかったね、と後ろの銀を振り向く。
にこやかに笑ってる。よかった。

「――――だから、急いでるのっ！！」

突然遠い人だかりの中から声が聞こえる。
ひと際綺麗で高いその声だけは、はっきりと聞こえた。
その声を聞いた青年は、あからさまに眉を顰めた。
そして、大きく溜め息を吐く。

「あいつは、また何をして……」
「あんたの所為じゃないの？　怒ってるよ？　仕事しろって」

小さく呟く青年の隣には、いつの間にか少年がいた。
背は私よりも低く、髪は水色。
瞳は深い藍色で、海みたいだ。
服は真っ白で、幼いのに冷たい印象を受ける。
びっくりする私の隣に銀がいた。
いつの間に……

「本当に、あの子の機嫌が悪いのは困るんだ。その所為でまたこれに会うことになったし」
「うるさいですよ、水竜。私こそ、貴方と会うのは不本意です」

「それは失礼、白竜」

少年は大人びた様子でそう言う。
というより、知り合いか。
そんなことを思う私を、少年は見つめる。

「巫女姫、ね。平凡な小娘でよかったんじゃないの？」
「小娘……」
「口を慎みなさい、水竜。消しますよ？」
「そういうの禁止だって」

そう私が言ったとき、人混みをわけて少女が飛び出した。
文字通り、飛び出した。
それが少女だとわかったのは、髪が長かったからだけど、その髪は、

「ああ、エリュー。いたけど？」

私と同じ漆黒で。
赤い瞳が怒りに輝く。

「やぁっと見つけた。カルディア閣下！！」

えっと、閣下って？

15　少年と少女（後書き）

出た！！
竜ぷらす1、です。巫女姫は気付いてないけど、白竜が言ってるから気付きますよね？
区切り悪いですけど、今回はここまでです。
今週末、暇なんですよね。だから更新回数がかなり上がる、というか。
来週になったらまた激減です。
テストは、もう終わったことだから気にしてませんよ。うん。過ぎたことですしね～。あははは。

番外編、またの名を行き詰った時の現実逃避、が書きたくなる今日この頃。

16　水竜の契約者

「って、えーーー！！」
「悪かったな。私は宰相だ。エリュテイア、ここは城下町だ。大きな声を出すな」
「元はといえば閣下が悪いの。竜なんてあたしだけでもいいのに。あたしはキュアと契約してるんだよ？」

少し幼さの残る高い声でぶう、とふて腐れた様に言うエリュテイアと呼ばれた少女。
黒い髪と赤い瞳を持つ少女に、水竜である少年は近づいた。
驚いている私は無視の方向らしい。
あの、宰相ってナンバー2だよね？　誰か説明して！

「エリュー、いつも言ってるのに。無理やりでも縛りつければいいって」
「ダメだから困ってるの。仮にも閣下だよ？」
「だから、雇われなくてもいいじゃないか」
「でも、キュアは竜じゃん」
「人間が勝手に祭り上げてるだけ。君が言うなら消すけど？」
「……ホント、竜だよね、キュア」
「竜だからね」

なんか、二人だけの世界……
言っていることは紫苑や銀と同じだけど、愛？を感じる。
お互いがお互いを思ってるような、そんな感じ。
少女は私と銀に気付いたようで、驚いたような表情をした。

「……はじめまして。白竜と、巫女姫様、かな？　ホントにいるんだ」
「あ、はじめまして。私は―――」
「名前なんて言わないでよ！？　巫女姫の真名なんて聞いたら契約が綻ぶ！」

いきなり少年が大声をあげる。
それはかなり焦っている様子で、びくっ、と言葉を止めた。

「水竜。姫を驚かせないでください」
「あんたこそ、止めなよ。僕はエリュー以外に屈するつもりはないね」
「あ。それ結構嬉しいかも」

にこにこと笑う少女に、少年は苦い顔をした。
というか、わけがわかりません。
そんなことを思った私を見て、少年は眉を顰めた。

「言ってないの？　巫女姫の真名の意味」
「聞かれていませんから」
「言ってよ！」
「そうですか？　なら言いますが」

前に聞いた気がするんだけど、とは言わないでおいた。

「では、説明しますがいいですか？」

ここには皇子様はいない。
少女、もといエリュテイアが無理矢理引きずっていった。
「エリューでいいよ？　それとこっちは水竜であたしと契約してるキュアノエイデスだからね？　じゃあ、また遊びに来てね～」
そう言いながら、どうやってかずるずると背の高い閣下を引きずっていった。
場所も変わって、何故城の近くにあるのか、薄暗い洞窟の中。
奥には水が沸いている。
なんでも、水竜であるキュアノエイデスの家、らしい。たぶん。
広いけど、ここに住んでるの？

当の本人はここに人を招くことに抵抗があるらしく、何でエリューもいないのにこんな雑用を、なんて愚痴っている。
ここに招いてくれたのはエリューだからね。

「うん。わかりやすくね？」
「これだから人間は……」
「うるさいです。水竜」

ふん、とキュアノエイデスは背を向ける。
そんなことも無視して、銀は語り始めた。

竜って仲悪いのかなぁ？

１６　水竜の契約者（後書き）

帝国編、って感じなんですけど、一番グダグダなんですよね。この辺。
水竜と少女がメインです。寧ろ主人公は脇役です。
この辺りからキャラが増えます。けど、この二人以外は基本覚えなくていいと思います。あんまり出番無いです。

書き溜めてる分があるんですが、シリアス一直線になっちゃって、どう軌道修正しようかと必死です！
ほのぼのを目指してたのにっ！
……そして、何故か終わりへと向かってます。
あれ？　日常を書きたかったはずなのに。
というわけで、軌道を変え、年内で終われるようにしたいと思います！
目指せ完結！　目指せ続編！！（違）

感想を誰か書いてくださらないかと期待中。

17　巫女姫の真名

「真名は【存在】そのものである一種の概念です。契約を交わす際に名付けるのは、その【存在】そのものを持ってして契約するという意味です」

はい？
意味が理解不能です。
わかりやすくって言ったのに。わからないよ。
よほど顔に出ていたのか、キュアノエイデスが言う。

「つまり、肉体とか命とか、全て取り去ったらその【存在】そのものになる。それをわかりやすく真名と呼んでるだけだよ。だからこそ真名は【存在】そのものに影響する。それを祝福やら束縛って言ってるだけ。わかる？」

……なんとなく。
う〜、と唸っていると、それは別にどうでもいいよ、と諦めたキュアノエイデスが言った。
そんな呆れた顔されても、わからないものはわからないよ！

「重要なのは巫女姫としての真名。先に結論から言うけど、さっきエリューの前であんたが真名を言ってたら、もしかしたらあの子は死んでた」
「……え？」
「僕はあの子と契約してる。でも、それよりも強い君の力で上書きなんてしたら、きっと壊れた。死ぬか、よくても精神が壊れて廃人だね」

きょとん、とする。
死んでた？　私が名前を言っていたら？
呆然とする私を置いて、さっさと話す。

「巫女姫は竜にとって絶対なんだよ？　そんな【存在】に真名を言われたら、僕は従うしかない。契約は一つだけだからね、エリューの方が解けてしまう。そしたら、【同化】の契約をしてるあの子は死んで当然だ。普通の契約なら死ぬところまでは行かないんだろうけどね」

淡々と。
ただ、かなり怒っていた。
言葉は平坦だけど、中身にはどろどろとした怒りがあった。

「いい？　あんたは【巫女姫】なんだ。それでいい。間接的な名なら平気だからね。今度エリューの前で真名なんて言おうとしたら、エリューが死ぬ前に、殺すよ？」

「水竜！　いい加減にしないと、死ぬのは貴方の方ですよ！　我らが姫になんという……！」
「いい。いいの。だって、大切な人なら、守りたいと思うもの。当然だよ」

大切な人が死にそうになっていて、その根源を取り除こうとするのは当然だ。
私は、自分が普通のままだと、そう思っていたんだ。
私はもう、【巫女姫】なのに。
知らぬ間にエリューを危険に晒してたんだ。
エリューは何も言わなかったけど、きっとわかってたと思う。
キュアノエイデスが言わないわけがない。

「ね、帰ろう？　銀。今日は疲れたよ」

このままキュアノエイデスの前にいたくない。
逃げてる。でも、誰かを殺しそうになって、そのままなんて無理。
そこまで図太くない。
銀は頷いた。
キュアノエイデスは、何も言わなかった。

……

１７　巫女姫の真名（後書き）

一番好きな水竜の話でした～。
ここ数話は一気に書いたため、内容が雑です。注意。
あと、次話かその次が、とんでもなく雑です。展開早っ、とか思ってもスルーしてください。
だって、水竜の思考回路が一番過激なんだもん……

この話と世界が同じ短編集、【誰かが紡ぐ御伽噺。】を始めました。
もしかしたら同じ登場人物が出るかもしれないので、その時はぜひ。

次回の投稿は早めにしたいと思います。
……雑なお話は早く終わらせたいです。ハイ。

18　青と黒、再び

「――――お目覚めですか？　姫。」

うぅ。
まだ眠いです、白竜さん。
でも起きないとな、と芋虫のようにもぞもぞと動いて起きる。
目の前にはいつもと変わらないお綺麗な白竜さん。
ああ、その美を少し分けてください。

「おはよう……、銀」
「おはようございます」

ちなみに、部屋の隅の方に紫苑がいる。
ただ、最近何を言っても無駄だとわかったので無視の方向だ。
顔はいいんだから、もっと愛想よくすればいいのに。

「姫、申し訳ありませんが少し用がありまして。私は出かけますがよろしいでしょうか？」
「ん？　いいけど……」

あれ？じゃあ、私は紫苑と二人っきり？
……うん、頑張ろう。
では、と言う銀を見送って、どうしようかな、と悩む。
だって、何もすることがない！
外に出るなんて無理だし、部屋は触りたくないほど綺麗。
……

「ねえ、紫苑～」
「何だ？」
「えっとね――――」

『まったく、何故我がこんなことを……』

ぐちぐち言う竜バージョンの紫苑の背中。
イコール空の上。
どこにいこうにも紫苑か銀がいないとね。
今はエリューに会いに行こうかな、と思っている。

また来て、って言ってくれたから。
名前さえ言わなきゃ平気だから。

『あれか？』

そう言う紫苑が指す（？）のはあの洞窟。
いや、思ったんだけど、エリューの職場ってお城だよね？
流石にお城には行けません。
というわけでキュアノエイデスに頼もうかと。
いなかったら帰るけどね。

「うん」

びゅう、と風が吹いたと思うと、もう地上だった。
どうやってやったのだろう、と思いつつ洞窟の方へさっさと歩いていく紫苑を追いかける。

「……またあんた……？」
「あ。キュアノエイデス」
「水竜か。人間と契約していたのは」

清水のような髪を揺らしてキュアノエイデスが出てくる。
紫苑はあまり興味なさそう。
キュアノエイデスは紫苑を見て、げ、とあからさまに嫌な顔をし

た。

「白竜の次は黒竜？　何で厄介な奴らばっかり連れてくるかな……」
「――ああ！　姫様だ！　久しぶり～」

呆れたような顔をするキュアノエイデスの隣を、エリューがとことこと出てきた。
黒い髪は私よりも綺麗で、いいなぁ、なんて思う。

「うわぁ。今度は黒竜なんだね。すごーい。ね、キュア？」
「そうだね。まったく、恐ろしいよ」
「閣下も馬鹿じゃなかった、ってことかな？」
「上司にそんなこと言って、不敬罪にならないの？」

するとエリューはきょとんとした顔をして、キュアノエイデスが説明する。

「この国の王族は僕に逆らえないからね。エリューにも逆らえないんだよ」
「あぁ、あたしは竜であるキュアと契約してるからね？　あたしにそんなことだぁれも言わないよ。後が怖いからね」

ね？　とキュアノエイデスに言うエリューは、思っているよりも子供じゃないかもしれない。

それにしても、仲いいなぁ。

18　青と黒、再び（後書き）

うわうわ。
体調不良です。鼻がずるずる……
一日本気で寝込みました。はい。

週末は何もできなかったので、今日はがんばるぞー、ともう一話書きたいと思います。
……でも、内容がおかしいです。
こんなはずではなかったのに！　うぅ。
二話連続でぐちゃぐちゃな内容、プラス軽度の流血表現です。
軽いんです。友人に「それはちょっとなの……？」と言われようがちょっとです。
どこからがグロイのかさっぱりな作者は、諦めました。
あいまいな表現で誤魔化しました。
……
突っ込み禁止の注意報出したいです。本気で。

19　恐怖劇の開幕

――――思ったよりも、エリューは可愛かった。
他愛もないお喋りをして、空はもう真っ赤。
紫苑は壁に持たれかかって、完全沈黙。
キュアノエイデスもエリューに話を振られない限りは無視。
けど、久しぶりの普通の会話は楽しかった。
うん。普通に飢えてたんだね、私。
珍しい女友達に浮かれる。

「ああ、もう日が落ちるね～」
「そうだね、もうそろそろ帰らないと」
「うん。また来てね？　いつでもいいから！」

にこやかに笑うエリュー。
ああ、可愛いなぁ。
そんなことを思っていると、不意にキュアノエイデスがエリューに耳打ちする。

「……それ、ホント？」
「もちろん。上手く忍び込んだみたいだけどね？　水に姿を映した」

「どうしたの？」
「ちょっと用事が出来て。じゃあまたね！」
「え、ちょっと――」

制止の声も聞かないで、走り出す。
洞窟内から姿が消えた。

「どうしたの？あんなに急いで……」
「侵入者。城にね。水に姿を映したみたいで見えたんだけど」
「侵入者って？」
「さあ？　また王族を狙ってだと思うけど……」

話していると後ろから紫苑が来た。
ふらり、といきなり視界に入ったらびっくりするじゃないか！

「帰らないのか？」
「でも、エリューが……」
「……おかしい」

不意にキュアノエイデスが呟く。
普通ではない雰囲気に心配になった。
聞く暇もなく外に出ようとする。

「キュアノエイデス！？」

「おかしい。聞こえない。エリュー？」

うわごとのように呟くキュアノエイデス。

不安がっているのか、怒っているのか、いつもの淡々とした態度じゃない。

どうしたのかわからなくて、戸惑っていると突然目を見開いた。

「！？　しまった、嵌められたっ！！」

「何が……」

キュアノエイデスが叫んだ途端、ざあっ、と洞窟内の水が波のように流れてきた。

呑まれる、と思って目を瞑っても、何も起きない。

そっと目を開くと、紫苑がいた。

何をしたのかはさっぱりだけど、水は私たちを素通りして外に出たらしい。

キュアノエイデスはどこにもいない。

「どういうことなの？さっぱりわかんない！」

「あの慌てようでは、契約者の方に何かあったのではないか？　それにしても、あの水竜、我らのことを無視して波を起こしたな……？」

お怒り気味の紫苑。

それよりも、エリューに何があったの？

「紫苑、二人の居場所はわかる？」
「……目を瞑れ」

言われた通りに目を閉じると、ふっと体が浮くような浮遊感に身を包まれる。
うわ、と思うときには地に足が着いていた。
目を開くと、そこは建物の中で、あのお城みたいだった。
紫苑が運んでくれたなら、どこかに二人がいるはず、と探し始める。
どこまでも続いていそうな廊下を走る。
長い長い廊下の角を曲がろうとした時———

ザシュッ

聞いた事もない、刃物が何かを貫く音と、

「あはっ。あはははははっ！」

誰のものか、想像もしたくないほど大量の赤い何かに濡れた、キュアノエイデスがいた。

Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｉｔ？

１９　恐怖劇の開幕（後書き）

きゃあっ！？
昨日中に出したかったのに！
ちくしょう、睡魔め。

「言い訳は見苦しいですよ？」

はっ！？
何故に貴様がここに……

「いやぁ、暇なんですよね～。用事も済みましたし、姫は不在ですし。黒竜はかえってこなくていいですけど」

……
姫と二人っきりにさせたら怖いんだもん。

「ほう？　裏で小細工をしていたと？　さあ、どうやって消しましょう？」

うわっ！　待てっ、話せばわかｒ（以下略

「ふふっ。作者不在で白竜はあれだから、ここは私、炎竜こと朱が終わらせましょう。以上、作者と白竜、炎竜がお送りしました。
　って、あらあら。私もどさくさに紛れて燃やしてこようかしら？
　灰が風に乗るさまは美しいものねぇ」

２０　狂気の錯乱（前書き）

流血表現、及び何か気分が悪くなりそうな表現有りです。
……これくらいのはグロイと言わないはず。（友人に止められた）

20　狂気の錯乱

「え……？」

それだけしか口から漏れなかった。
ただ、目の前の光景がおかしすぎて。
狂いすぎていて。

「わかってるんだろう？　だから、僕の契約者に、エリュテイアに手を出したんだろう？」

真っ赤に染まって、それでも服は吸いきれなくてぽとりぽとりと落としてしまう。
それは――――

「許されると思ってる？　そんなわけないよね、僕の大切なモノを傷つけたんだから」

赤い、鮮血。

その中で嗤って、彼は言う。
渦巻くのは、恐ろしいまでの狂気。
そして、ただ純粋な、それ故に狂気的な愛。

「僕の、僕のエリューに、君は何をしたのかなぁ……？」

彼の視線の先には、蹲（うずくま）ったエリューと、恐怖に身動きが出来ない誰か。
真っ黒な服は血濡れで、周りにはそれを提供した何人もの死体。
いや、違う。
こんなの、人じゃない。
冒涜的までにぐちゃぐちゃに引き裂かれた、まるで子供に遊ばれた粘土のような、肉塊。
それは、それは———

「見なくていい。壊れるぞ」
「あ……。しお、ん……」

目を紫苑の手が覆う。
それでも、この空気は肌を伝わってくる。
怖い。

「ふふっ。何で言わないの？　ほら、言ってごらんよ」

声が、怒りを抑える声が、聞こえる。

「ほら、どうしたのさ。ねぇ、エリュー。君は何をされたの？」

う……、と微かにエリューの声が聞こえた。
痛みを堪えるように、微かに。

「だ、め……。キュア、だめぇ……」
「何が駄目なの？　随分と前に言ったはずだけど。君を傷つける者は、殺すって」

ふふふ、と笑うキュアノエイデスは、明らかに壊れていた。
憎悪、憤怒。
どろどろとした暗い感情が見える。
でも、こんなのおかしい。
エリューを助けるのが先に決まってるじゃない！
意を決して紫苑の手を退かして、エリューに駆け寄る。
今にも殺されそうな黒尽くめの怪しい人や、今にも殺しそうなキュアノエイデスは無視。
不規則な呼吸をするエリューは苦しそうだった。

「大丈夫？　傷はどこ？」
「姫さ、ま……？キュア……、止めなきゃ……」

ふらり、と立ち上がるエリュー。
腹部に手を当てて、そこから血が流れていた。
止めようとするが、紫苑が手を掴んだ。

「紫苑？　何して……」
「あの水竜を止めれるのは契約者だけだ。無理矢理でいいのなら我が止めてやるが？」

紫苑の無理矢理は、穏便ではないのだろう。
う、と手を引っ込める。

エリューはふらふらと、歪に嗤ったままのキュアノエイデスに近づいた。

一度壊れてしまっても、元に戻るの？

２０　狂気の錯乱（後書き）

―――すいませんでしたあぁぁ！！
何か調子乗りました。はい。認めます。
こういうの嫌い、なお方。及びこういうの苦手な友人さん、すいません。
でも、だって、エリューと水竜が出てきた時点で書くつもりだったんだもん。
これだよ、コレ。自分で書いたのにもうイヤっ！！
とりあえずこの話はスルーの方向でお願いします。
……
駄目だーーー！　水竜が何か壊れたーーー！！

21　怒りを静める黒い少女

「エリュー？　どうしたの？　そこを退いて」
「だめ。ダメだよ。いやだよ、キュアが紅いの」

ふら、と倒れるエリューを、慌ててキュアノエイデスが受け止めた。

「キュアは青いのがいいの。赤いのはあたしだけでいいよ……」

俯いて表情も見えず、声も震えている。
キュアノエイデスが顔を顰め、嗤いを止めた。

「……それを僕に言うの？　僕は竜だよ？　そんなこと、不可能でしょ？」
「バカ。不可能じゃないって、言ってよ……」

バカ、と泣きそうな声で言う。
泣いているのかもしれない。見えないから。

そのとき、恐怖に動けなかった黒尽くめが動いた。
気付かなかったけど、赤く光る剣を持っている。
その剣をエリューに向けて――――

「――――いい加減にしろよ、醜い人間め」

低い、地を這うような声をキュアノエイデスが発した。
すると黒尽くめはうっ、と声を上げて倒れた。
何が起きたのかはわからないけど、竜にそんなこと関係ない。

「キュア！」
「殺してないよ。そんなことしない。後で痛めつけて指示した奴を吐かせるから」

淡々と、エリューを抱きしめて言う。
大事そうに、優しく。

「あ……。エリュー、大丈夫！？」
「姫様、大丈夫だよ～？　もう治ってるから」
「え！？」

そう、怪我だ。
何が大変かって、お腹を刺されてたみたいだったから。

でも、当の本人は笑って、ほら、と真っ赤に染まった服を捲り上げた。
違う意味でぎょっとする私とキュアノエイデスを無視して腹部を私に見せた。

「嘘……。あんなに痛そうだったのに」
「キュアの契約者だからね～」
「そんな所を見せないでよ！　こんな所で！」

傷なんてない。
綺麗な白い肌だけがあった。
キュアノエイデスは違うところで突っ込んでいる。

「【同化】の契約だろう？　それならもう人間と同格では考えるな。既に我らと同じだ」
「どういう意味なの？　今さっきまであったよね、傷」
「全てを契約者と共通する、そういう契約だ。知識も力も、自己治癒能力も例外ではない」

いつの間にか隣にいた紫苑が言う。
それって凄くない？
竜と何もかも共通するなんて、凄すぎる。
あんなに強い竜なんだから。
っていうか、そんな凄い治癒能力持ってたのね、貴方たち。

「そういうことだよ？　痛いのは変わらないけどね？」
「……もっと早く気付いていればよかった」
「いいのに。悪いのはこの人たちだもん。ね？」

視線の先には、少し忘れていた見たくもない惨殺死体。
急に思い出して、うっ、と息が詰まる。

「もう帰りなよ。時間がどうとか言ってなかった？」
「ああ！　銀が心配するっ！！　帰るよ、紫苑！」
「ああ」
「じゃあまたね～」

ふわ、と浮遊感が包む。
次の瞬間には外だった。
空は、もう薄暗く、星が輝いている。
綺麗だなぁ、と言いながら、竜バージョンの紫苑の背に乗った。

……銀に怒られそう。

21　怒りを静める黒い少女（後書き）

……寝込んでました。熱で。
すいません遅すぎましたーーー！！
というか話が浮かばない。どうしよう。
最近はゲームの方が調子いいんですよね～。もうすぐクリスマスですし。
……番外編、書くべき？
次はもう少し早くできればと思います。本当に。

22　竜、すなわち？

「さて。何故姫は血の香りを纏っているのでしょう？」

きゃーん。魔王様の降臨ー。
いや、ちょっと軽めで言ったけどね、実際はもっと恐ろしいですよ？　ええ。
白いのに黒いよ、銀。
というより、紫苑、助けてよ！！

「愚かな人間が水竜の逆鱗に触れただけだ」
「そうですか。で、何故貴方はそれを回避できなかったのでしょう？」
「いちいち人間のやることに口を出せ、と？」
「我らが巫女姫に関わるならば。当然でしょう。唯一にして絶対の存在のため」
「ふん。我はそれを主とは認めん」
「ならば永久に独りでいればいいでしょう？　私は、姫に仕えます」

心臓に悪い威圧感。動けないプレッシャー。
何で二人の口論はマシンガントーク並みに止まらないんでしょう。

何で明らかに睨み付け、不機嫌な紫苑よりも微笑を携えて、さらりと怖いことを言う銀の方が恐ろしいんでしょう。
ああ、あれだ。ギャップというものだ。
怖い顔をして怒るよりも、笑って怒る方が効果があるらしい。
心理学で読んだなぁ。ずれていたり変だと効果が上がるらしい。

「忌まわしい災厄め。真に恐れられるのは貴様だろう」
「そうかもしれませんね。水竜では私を殺すことは出来ないでしょう。ですが、その時に私はそこにいないのです。姫を守ることが出来ない」
「ならばこれの傍にいればいいだけのこと。我まで巻き込むな」
「契約者もいない竜がよく言います。姫に認められもしない若造が」

い～や～！
キャラ壊れるから若造なんて言わないで！
そんなに歳変わらないように見えるんだけどねぇ。かなりの差があるらしい。
実をいうと話の内容なんてあんまりわかっていない。ただ、雰囲気が怖い。

「貴様も同等ではないか。自身の血を呪うのだな」
「もう既に呆れるほど呪われているはずですから。手遅れでしょう。それに、自分の欲望に従ったまでのこと。それほど忌まわしくもないでしょうに」
「竜の価値観だな。だが、同族であっても呆れるほどの執着だ。彼(か)の【災厄】と並ぶとされているほどだぞ？」
「それは貴方がまだ幼く、真に欲す契約者を手に入れていないから

でしょう。いつか貴方にもわかりますよ。狂うほどに、ね」

……私、自分の存在価値を問うよ。
最初は私の話だったのに、どんどん罵り合いになってる。
内容はわからなくても、お互いに言われたくないところを言っているんだとは思う。

それから、私は完全無視で二階の自室と化している部屋に向かった。
あんなのに構っていたら日が暮れる。
真っ白ふかふかのベッドに、古風な木の箪笥。並んで棚。
木の中なので流石に窓はないけれど、ゆったりとした場所。
案外気に入っている。

疲れているのでベッドに倒れ込む。
ちなみに、服は当初と変わらず制服だ。
何故か、汚れない。銀が何かしてくれているようだけど。
帝国に言った時に浮いていたのは言うまでもない。
けど、黒という時点でかなり浮いていたのであまり誰も気にしてなかった。

「……竜は平気で人を殺すのかな」

あの時はびっくりしていて気付いてなかったけど、紫苑もキュアノエイデスも人を殺すということに対して何も感じていなかったようだった。
エリューも、やめてとは言っていたけど、怖がる様子はなかった。

あれが、当たり前のように。

普通、というものが何だかわからなくなってきている。
とても、不安定だ。
そんなことを考えながら、夢の中に沈んでいった。

……

22　竜、すなわち？（後書き）

……

いや、ホント、何なんでしょうね。
強制シャットダウンとか、コンセントの挿し忘れとか、保存してなくてちょっとデータ飛ぶとか。
……はい、お久しぶりでございます。師走ですね～。
生徒の方なのになんですかこの忙しさ。生徒会選挙とか知ったこっちゃないですよ～。
……すいませんっ！　本当に、マジで、パソコンすらろくに触ってませんよっ！

「あの、ゲームだっけ？　あれはやってたみたいだけどね」

水竜黙れっ！
いや、だって、ポケ○ンのリメイクだぞっ？　一番面白かったであろう二世代目のリメイクだぞっ！　原作のソフト壊れてるから出来なかったんだよっ！！
そしてリメイクやるまでレ○ドが初代の主人公だなんて気付いてなかったわ！！

「いや、そんなこと言われても知らないし。熱心にやってたのは知ってるけどね」

だって面白いんだもんっ！　ル○アとか欲しかったんだもん！

「いや、だから知らないってば。レベルが８８まで上がったのは知ってるけどね」

だって、だって――――

（だらだらとポ〇モンの良さについて説く）

「……うん。キュアには悪いかもだけど、さっさと終わらせよっか。以上、キュアを生贄にしてエリューがお送りします、わかる人にはわかるよねっていう作者の叫びでした～。

……でも作者テイ〇ズもやってなかった？　何か絵を描くソフトも見たんだけどなぁ」

23　黒と赤の悪夢

――――暗い。
ここは、どこなのだろう。
海の底のように、闇は貪欲に私を包む。
……飲み込む。
ゆらりゆらりと漂っている。

そして、どこからか赤が混じった。
それはまるで、真っ黒な水に赤い絵の具を垂らしたように、滲む。
黒を、闇を押しのけ、飲み込み、赤が全てを奪う。
どうして、怖いのだろう。
この赤は――――駄目だ。

「いや……っ！？」

駄目だ。このアカは駄目。
ダメ。だめだ。このアカに触れてはいけない。
このアカは、全てを奪う。

そして、視界の端に、一瞬だけ白が見えて。
アカが、血であり、炎であり、死の証なのだと理解したとき。

世界が、夢が、終わりを告げた。

『そう。全てが終わる。いや、ワタシが終わらせる。それが罪であろうと、咎人と呼ばれようと――――』

そう。これは、終わりだ。

２３　黒と赤の悪夢（後書き）

明けましておめでとうございます！

はい、年が明けました。
話終わりませんでした。
ついでにデータちょっと消えました。
……
ということで、だったらいっそのこともっと頑張っちゃおうぜ！
というテンションになりましたので、予定を大幅に変更してお送りします。
いや、あれです。開き直りました。
終わりに向かっていた路線を変え、もう少ししっかりした話しに、したいと思います！

「……断定でないところが貴女らしいというか……」

黙れ白竜。
でもさ、いいじゃん。君の出番増えるみたいだよ？

「……断定じゃないんですね……」

はいはいはい、それではちょっと新章かも？　な今回も見てくださいましてありがとうございました！

＊　邪なる者　＊

あれは、いつのことだっただろう。
そんな些細なことさえも、ワタシは忘れてしまっている。
いや、憶えていないという方が正しいだろう。

燃え上がる民家。逃げ惑う人間。赤く染まった村。
絵のように、細切れになった映像。記憶の欠片。
ただ、何よりも鮮明に憶えているのは。
――――君の姿。

誰よりも美しく、誰よりも気高かった君。
その君が堕とされて、穢されて。
耐えられるはずなんてない。

自分の中のどす黒い感情がわかった。
君はワタシのことを純粋だと言ったけれど、ワタシはそうは思わない。
純粋な者が、こんな感情を持つわけがない。
こんな、全てを壊したくなるなんて。

ワタシは、今でも待っている。
君が来ることを。戻ってくることを。還ってくることを。
全てを犠牲にして、やれることは全て行った。
だから、どうか。
君がワタシの前で笑ってくれることを望み、願いながら、ワタシは瞳を閉じ続ける。
ワタシの愛しい＊＊＊。君のためならば、どんなことだってするよ。
何故なら、ワタシは――――

＊　邪なる者　＊（後書き）

雰囲気がいつもと違う番外編です。
短いので早めの投稿なんですけど、書き溜めの分がもうない……
そして白竜が出しゃばるっていうね。うん。黒竜帰ってこ～い！
腹黒キャラが大好きな作者ですヨ。
そして黒竜が書き辛いんです。
腹黒な白竜とツンデレ（？）な黒竜ってどっちがいいんだろう。
黒竜の方が人気ある……よね？

２４　悪夢から

「――――うあ……っ、ああっ！！」
「ひ……姫……、姫っ、どうなされましたかっ！？」

はっ、として目を開けると、そこには銀がいた。
心配そうに私を見下ろす銀。
私は呆然とした頭の中で、少し考えて思い出した。
――――嫌な、夢を見た。

「……ううん。ごめん、嫌な夢を見ただけだから……」
「平気ですか？　無理はしないでくださいね？」
「うん。ありがと」

黒と赤の悪夢。
苦しくて切なくて哀しい、そんな夢だった。
ただ、夢を見ていた時はあんなにはっきりとした感情が、今では残像のようにしかのこっていない。
あいまいにしか覚えていないことに安堵し、少し残念だった。
どうしてだろう。苦しい夢なら、忘れたままでいいはずなのに。

「……気分転換でもどうでしょう。外に出かけてみては？」
「うぅ？　エリューの所？」
「いえ、他にも国はございますし、そちらでもいいかと」
「他の国？」

帝国はイメージ的には敵な感じがする。
何か、こう、ゲームで出てきたら確実に敵国だと思うんだ。
黒いし、黒いし、黒いし。
まあ、そんなことはどうでもいいのだが、明らかに明るい、王道な国ではないだろう。
どちらかといえば、ラスボスがいそうな雰囲気がある。

「ええ。この世界には、大きな国が三つあります。帝国と王国、そしてティーアですね。主に帝国と王国は人間、ティーアは多種族が暮らしています。帝国と王国は休戦中で、ティーアはその中立、というよりも自衛以外の戦闘をほぼしませんので、ティーアは様々な観点から特別視されることが多いです。あそこは国といってもあらゆる民族が集まっただけのようなものですしね」
「……はぁ」

難しいよっ！
取りあえず、帝国と王国とティーアっていう国があって、ティーアだけは人間以外が多いと。
そういうことでしょうか？

「帝国は絶対王制といっても過言ではありませんので、皇帝によって評判は変わりますね。現在はあまり何も無いようですが。王国は王と貴族が集まった議会によって政治を行っています。まあ、一部の貴族の国となっていた時期もありましたけどね。ティーアはそれぞれの民族の長が集まり話し合いの場を設けています。一応最も力の強い者を代表者としています」

「……」

もう無理です。勘弁してください。

そんなつらつらと言葉を並べられてもわかりませんよ？

これでも社会は二に近い三だったんだ。

銀は呆然としている私に気付いたのか、少し苦笑して話すのを止めた。

「異世界から来た姫にはわかりませんよね。取りあえず、小国を除いてはこの三つが有名です。ティーアは少し複雑なので、王国にでも行きますか？」

「うん。あんまりわからないからはっきり言ってどこでもいいよ」

「はい。でも、私はあまり王国を訪れたことがないのですが」

「え」

平気ですよ、と銀は笑うが、どういう意味で大丈夫なのか銀の場合恐ろしい。

大丈夫かなぁ。力ずくは勘弁してね？

少し不安を覚えながら、私は銀に誘われて外に出た。

あれ？　そういえば紫苑は？

２４　悪夢から（後書き）

説明の回でした。
あらら、黒竜は出番無し？　どうしよう。
だって、黒竜説明できないじゃん！
しばらくは白竜が出しゃばることでしょう。
……マジで黒竜が影薄すぎる。

さて、次回は新キャラ登場？
何で黒竜を出さずに新キャラを出すのか。なんてワカリマセンヨ。

25　出逢ったのは

「わぁっ！」

またもや空の旅、銀の上からお送りします～！
やっぱりこのふわふわな乗り心地は最高だよっ！
どんな絶景にも負けない景色は、目まぐるしく変わっていく。
いつも思うんだけど、何でこのスピードで速さを感じないのかな？　絶対何かしてるよね？
あんまり時間もかからずに、すぐに銀は地に降り立った。

「ここが王国です」

少し遠い森の中に降りた銀は、毎度のことながらいつの間にか元の姿に戻り、遠くに見える城を指して言った。
真っ白で大きな白の両脇に、同じく白い塔が一つずつあった。
御伽噺に出てくるような、メルヘンな城。

「すごっ……」
「歴史だけは一番長いらしいですから」

おお、と眺めていると、不意に視界の端に何か見えた気がした。
きらり、と一瞬の光。そして、
――――がんっ

「きゃあっ！？」

少し距離はあったようで、実際にはその音だけだった。
銀は私を庇うように立っている。

「――――だからっ、いい加減にしなさいっ！！」
「酷いなぁ。そこまで僕を邪険にしなくてもいいじゃないのかい？」
「貴方は自分の立場を理解していますかっ！？」

高い、少女の怒りを含む声と、反して穏やかな青年の声。
音が聞こえた方から、場違いな声が聞こえてくる。
穏やかとは言えないながらも、決して険悪ではない雰囲気。

「……何？」
「さあ。私にはわかりませんが」

どうやったら今さっきの音とこの場面が繋がるのかなんて理解できない。
ただ、少女の声が切羽詰ったような、そんな感じに思えた。

「その怪しい手を退けなさいっ！！」
「え～。僕はただアリアを好きなだけなのに」
「っ！　こんのエロ王子っ！　いい加減にしないと本気で消すわよっ！！」
「あはは。怖い怖い」

……本気で何？
なんだろう。R指定掛かっちゃう？

「っていうか、王子……？」
「王国の王子は一人だけですよ。確実に次期国王でしょう」

あんな発言する人が国王でいいの？
いや、そんなこといつだってあるけどさ。
遠くから聞こえていた声は徐々にはっきりと聞こえてくる。
……あれ、近づいてるってことじゃあ？

「「あ」」

木々の隙間から、いつの間にかかなり近くにその人はいた。
一人は黒髪黒眼の女の子で、思いっきり私を凝視している。漆黒のコートを身に纏い、胸元にある紅いペンダントだけが色彩を持つ。
もう一人は青年で、その女の子を追いかけるように後ろにいた。

金髪緑眼のまさしく王子様な容貌。服も高級そう。
女の子、といっても私より年上であろうその人は、驚いたように私を見ていた。

「……日本人……？　嘘でしょう……」
「ええっ！？　貴女もっ？」

思わず大きな声で問い返していた。

え、ここに来てまさかの同郷さん？

25　出逢ったのは（後書き）

R指定は掛かりません！
いや、それだけは声を高らかにして叫びますよ、叫びますとも。
何故なら！　作者である私がRは無理な年齢だから！
じゃあ何でRの存在を知っているんだとかは聞いちゃいけないお約束です。ハイ。

新キャラ登場&王国編開始なお話でした。
同郷さんですよ。話の通じそうなお人ですよ。
そして王子にストー「それは言ってはいけませんよ」……もとい愛されている子です。
っていうか何で白竜？

「私の会話文があまりにも少ないからです。空気じゃないですか」

だって新キャラ「黒竜が不憫です」すいませんでしたホントごめんなさい。
黒竜嫌いなわけじゃないよ！　寧ろ好きだからね！！

26　同郷の少女

「私はアリア・マレディクスィオン。二年ほど前にここに来て、今は薬師をしているわ」
「アリア、まれでぃくすぃおん……？」

言い難い。まれでぃくし、ん？　すぃおん？
舌が絡まるよ。どんな名前なのさっ。
アリアさんは少し笑って、私を見た。

「ここでの私の名前よ。本名じゃないわ、流石に。マレディクスィオンは王から頂いた名だもの」
「アリアの功績は称えるべきものだからね。流石僕のアリア」
「誰が貴方のものよ」

アリアさんの後ろから王子様（？）が言う。アリアさんは思いっきり肘を落とし、王子様の鳩尾にヒットした。
うわぁ。容赦ない。

「うっ……。酷いなぁ。王から名字を貰うって結構凄いんだよ？

しかもアリアは城の人間でもないしね」
「……この救いようもない王子はフィーリウス・レーギス。一応この国の第一王子よ」
「救いようもないってところは無視してあげるよ。はじめまして、お嬢さん」
「は、はあ」

苦手な人種だ。
にこにこにこにこと挨拶をする王子様はさっきのアリアさんの暴挙にもめげず、アリアさんの肩に手を伸ばす。

「……王子、いい加減にしないと切れるわよ……？」

ばしっ、とその手を叩き落とされる。
何だかなぁ。王子様のイメージがなぁ。
私の後ろにいたままだった銀が少し前に出る。

「私は白竜の銀です。こちらは我らが巫女姫。無礼があればたとえ王族であろうと消しますから」
「そういうの禁止っ！」

あれ。デジャブ。
銀の一言に、アリアさんはへぇ、と声を漏らし、王子様はそのままにこにこと笑っていた。

「竜……。母なる大樹から出でる世界の調律者であり、最強の聖獣……」
「異世界の者にしては詳しいですね」
「ええ、まあ。そういうことを調べるのが好きだから」

？　どういうことだろう。
新しいキーワードが出てきたけど、私にはよくわからない。

「……立ち話もなんだから、私の家に来る？　すぐそこよ」
「すぐそこ？」
「私、人が多いところは苦手だから。この辺りに家があるの」

森の中に！？
皆たくましいなぁ。アリアさんって本当に私と同じ日本人？

ん？　何だかアリアさん銀と距離とってるような……

26　同郷の少女（後書き）

主人公のスルースキルが高すぎて話が逸れていくっていうね。

ちなみに、アリアは元々ネタ帳的なものに書かれていたキャラです。
考えるのは好きなんですけど文章にしようとは思わず、もったいないから残しておこう、とノートにつらつらと。
なのでどっちかというと主人公的キャラクターだったり。
だから王子とフラグ立ってたり。
とか言いつつアリアが滅茶苦茶お気に入りな作者でした。

26―27　結末について

「――あら。こんなところに、一体何の用かしら？」

不意に後ろから掛かってきた声に、我は顔を顰める。

本来ならば消してやろうと思うところだが、場所が場所だ。仕方あるまい。

振り返れば、悪趣味な笑みを携えた炎竜がいた。

「……その言葉、お前にも当てはまるぞ」

「ふふっ。私はただの興味だわ。全てに無関心な貴方が気に掛けるモノ」

炎竜は笑う、嗤う。

これは人の神経を逆撫ですることが好きらしい。悪趣味だ。

「だって貴方、自分が【再生】した理由である白竜にさえ無関心なんだもの。そんなのつまらないわ……」

「お前の嗜好など知ったことか。我を巻き込むな」

「……あの白竜は邪竜のように堕ちたりしないわ。だって全てを諦めているから」

炎竜は心底つまらなさそうに、先ほどまで我が見ていたモノを見つめる。

ここは母なる大樹の内であり、深い空洞の最深部だ。
腐食されつつある大樹の原因が眠る封印の地。
———全てを破壊しようとした、邪竜がそこに眠っていた。
幾重にも張り巡らされた鎖が竜を縛りつけ、その瞳は開くこともなく、ただそこに存在していた。

「希望は絶望の中にしか存在しないのに、白竜はそれすらも否定しているんだもの。あの子には何もないわ。何か企んではいるようだけれど、今回も結局紫竜たちに阻まれて終わりよ。ああ、つまらない」

……これは馬鹿なのだろうか。
邪竜が再び表に出れば、今度こそ滅びを迎えるかもしれないというのに、それをつまらないとは。

「狂おしいほどの愛が世界を壊すのなら、それほどの物語はないと思わない？　とても素晴らしい御伽噺だわ。—美しい偽りの幸福な結末よりも、醜い本当の不幸な結末の方が愛せるでしょう？」
「お前が一番狂っている」

はっきりと断言してやると、炎竜はこちらを見て笑った。
それはそれは、楽しそうに。

「そうかしら？　一番狂っているのは、存在そのものが狂っている貴方じゃあない？」

くすくす、と。

それは我が一番理解している。

26－27　結末について（後書き）

べ、別に黒竜の出番の少なさに同情したわけじゃないんだからねっ！

……気持ち悪いのはご愛嬌、の作者でございます。

そういえば炎竜も出番少ないんだよね、ごめん。

とりあえず、来週の更新は無理かな、と思われます。

ワーク類の宿題が多い多い。今日中に社会終わらせるんだぜ！

と、また新しいゲームを買うからです！（オイ

何故ならば！　誕生日だからだぜ！　イェーイ！

一人っ子の特権ですよ、ゲームが多いのは。

というわけで、黒竜視点でお送りしました番外編でした～。

27　王子と呪術師と

「……」
「いつ見ても凄いね」

絶句。
アリアさんの家にはすぐ着いた。木造の、小さな一軒家だ。
確か、薬師だと言っていた。言っていたけど、これは……
入ってすぐに目に付いたのは、所狭しと並べられている薬や草。
おそらく薬草なんだろうけど、量がありえない。
奥へと続く扉と、今私たちが立っている玄関以外の壁は全て埋まっていた。
異様な風景が、怪しすぎる……

「種類が多い方がいろいろと便利でしょう？　あ、劇薬もあるから注意してね」

……そんな恐ろしそうなものを置いておいていいのだろうか。
部屋の中央に丸い机と椅子が四脚あった。机の上にはまたまた草がずらり。

「座って。それには触らないでね。麻薬の一種だから」
「……あの、アリアさん。こういうのって日本と種類違いますよね？　勉強したんですよね？」

「ええ。でも結構楽しいものよ。作るのも採るのも使うのも」
「ねえアリア。それって王国では所持禁止だよ？」

話しながら銀が引いてくれた椅子に座る。
それにしても、アリアさんがここにある大量の薬草を知っているなんて。同じ日本人なのに凄いなぁ。

「知っているわ。バレなければ問題ないでしょう？」
「……ウィズダムにバレたら牢屋行きじゃないのかい？」
「貴方が止めれば問題ないわ。……お茶を淹れるから、ゆっくりどうぞ」

なんだか危険そうな雰囲気がしたがスルーだ。
こっちの世界に来てからはスルー率が格段に高くなった気がする。でも触らぬ神に祟りナシ、だ。気にしない気にしない。
アリアさんが奥の部屋に入って行ったのを目で追ってから、王子様は私を見る。

「それにしても、お嬢さんが巫女姫ね。異世界人って皆して見た目と実力が伴わないなぁ」
「侮辱でしたら容赦いたしませんが？」
「銀、ダメ。えっと、皆してっていうのは、どういう意味ですか？」

危険な銀を止めつつ、気になったことを聞く。
見た目と実力って何？　私見た目どおりの一般人ですけれども。
王子様はにこにこと笑ったままだ。

「アリアは薬師をしているけれど、呪術師でもあるんだ。敵に回すと怖いよね。呪術に魔術に毒薬なんて。危険物のオンパレードだよ」
「呪術師？　何ですかそれ」

「実をいうとあんまりよくわからないんだけれどね。魔術とはまた違ったものだと認識しているよ」

……なんだろう。アリアさん凄い。

っていうか、本当に異世界人？　この世界の知識が異様に多い気がするんだけれど。

「あの、アリアさんっていつこの世界に？」

「ん？　そうだねぇ、二回季節が巡ってるから、二年くらいかな？」

「二年でそこまで……」

「あはは。まあ、アリアは頑張ってたからね。自分の居場所を作るのに必死だったし？」

「――――王子。余計な話は結構。それよりも早く城に戻りなさい」

ぎろり、と奥から帰ってきたアリアさんは王子様を睨みつける。

め、滅茶苦茶怖いよ？　そして王子様はどこ吹く風。

なんだかなぁ。王子様なのになぁ。

27　王子と呪術師と（後書き）

はい、お久しぶりです。
部活が休みなもので、少しだけ顔を出しに来ましたよ。
……ゲーム、終わってないけどね。

よし、小説漁りに行くぞー。
面白いのないかなぁ、と友人に相談しても趣味が合わないという現実。
友人曰く、そんなグロイの読めない、だそうです。
誰か読んでみてよ！　グロイだけじゃないから！
と言ってもスルーされる虚しい現実。ぐすん。

28　問いと答え

「――で、それよりも、よ。聞きたいことがあるんだけどいいかしら？」

不意に真剣な口調で、しかし実際は王子様の足を踏みつけながら私に向かってアリアさんは言う。

……あのさ、本当に王子様相手にそんなことしてもいいの？　何か心配だよ？

もちろん、銀は無視している。

「は、はい。何ですか？」

「風竜よ、風竜！　貴女が巫女姫ならば、あれを捕まえられない！？」

「ふ、風竜……？」

かなりの剣幕でばしっ、と机に手を突きながら言うアリアさんは怖すぎる。

逃げるように銀を見やると、にこにこと笑いながら答えた。

「我ら竜は全部で七匹。私、白竜と黒竜、炎竜水竜はもう会ってますけれど、後他に風竜地竜、そして紫竜がいます」

「あれ？　紫？　一人だけおかしくない？」

「紫竜は【始祖】の一角にして竜の長です。別格なんですよ」

うう、なんだかなぁ。それにしても何で紫？
白黒、赤青緑黄色に紫？　なんというカラフルな種族なんだろう。
「風竜は元々放浪癖がありますし、今頃どこにいるんでしょうね」
「どうして竜は全員自己中心的なのかしら？　あいつ、私の薬草をふんだくりやがって……許さん」
「アリア、口調変わってるよ～？」

一瞬かなり黒いオーラを放ったアリアさんは、王子様の一言に我に帰る。
口調って変わるものなの？　どうなの？
へらへらと笑う王子様を睨みつけてから、本題に戻るアリアさん。
「帝国の水竜は契約者一筋だからわかりやすくていいし、地竜もある程度常識があるからいいのだけれど」
「……アリア？　いつの間に帝国に行ってるんだい？」
「……」

今度は王子様が黒くなった。
もう、何なのさ、これ。

「……断固黙秘」
「まぁ、今更何も驚きはしないけどね。規格外にもほどがあるんだよ、君」
「それはニュクスのことかしら？」
「全部まとめてね。何をどうしたら悪魔と契約が―――」

がんっ
かなりの音が立ち、王子様が黙る。ただその表情は憂いを含んで

いた。
何が起こっているのかわからない。アリアさんと王子様が視線だけで会話する。
「巫女姫さん？　王国にははじめて来たんでしょう？　案内するわ」
「え、あ、はい。ありがとうございます」

家を出て行くアリアさんについていく。もちろん銀も。
王子様はひらひらと手を振っていて、行く気はないよう。

「いってらっしゃい」
「貴方は城に戻りなさいよ。ウィズダムに文句を言われるのは私なのよ？」
「しらばっくれるのは君の特技じゃないか」
「……この馬鹿王子……」

ぼそり、とアリアさんは言った。うん、聞こえなかったことにしよう。
行きましょう、と私に向かって言うアリアさんに付いていく。

なんだかなぁ。

28　問いと答え（後書き）

後書きは一応活動報告に移動です。
懲りずにはじめた別作品も見てくださったら幸い。
……いや、短気なもので。

28－29　大樹の下で

「――――まったく、久しぶりに帰ってきたと思ったら、このメンバー？」
「悪かったな」
「ふふ、酷い子」

いつも通り不機嫌そうな黒竜と、内容と表情がまったく合っていない炎竜。
会話が成り立たない二人しかいないのか……

「どうしたのかしら、水竜。　【黒き民】に熱中していると聞いたのだけれど？」
「エリューは仕事。また反乱分子が出たとか。人間も飽きないね」
「それが人だもの。欲望に踊らされる、憐れなモノ」

何が楽しいのか、くすくすと笑う炎竜。
黒竜は炎竜が嫌いなはずなのに、ここから離れようとはせず、壁にもたれかかって目を閉じていた。

「……ホント、面倒臭いんだよね。エリューを僕から奪うモノなんて、全て消えてしまえばいいのに。全て、滅びてしまえばいいのに」

溜め息を吐きながら言う。

炎竜は僕の心からの言葉に閃いたように笑う。

「あら？　だったら邪竜を開放すればいいわ。そうすれば、きっと今度こそ邪魔なものが全て滅びるわよ？」

「……黙れ、炎竜」

「ふふっ。だって、いいでしょう？　人間は嫌われているわ。貴方だって、人は嫌いでしょう？　きっと楽しいわ。自分の嫌いなものを、自分の手で滅ぼせるのだもの」

ふふふ、と狂気的に笑う炎竜と、それに軽蔑するような視線を向ける黒竜。

炎竜には柵（しがらみ）がない。僕はエリューのためにあまり人を殺さないし、黒竜はそういうものだけど、炎竜は面白いことを全てにおいて優先させている。

「だからこそ、あの邪竜は狂ったのだしねぇ？　愛するモノを奪われた、可愛そうな子」

ぎろり、と黒竜が炎竜を睨む。炎竜はただ楽しそうに笑うだけ。

僕としては炎竜を理解することはできないけど、黒竜も理解できない。

したいことがあるならすればいい。なのに、全てを甘んじて受け入れるなんて。

「……ところでさ、紫竜は？　ちょっと用があるんだけど」

「紫竜？　あの人なら「カミサマ」を探しに出かけたわ」

神様、ね。

神というのは実在する。ただ、それは神なんていう高貴な存在ではない。

どこまでも無慈悲で、どこまでも不平等。気まぐれで生かしも殺しもする、最低な奴。
真実を知るのは【始祖】たちだけで、僕らは会ったこともないのだけれど。

「最近世界の境が薄くて、秩序が乱れてるって叫んでいたわねぇ。無駄な異邦人を増やさないでほしいと言いに行くらしいわよ？」
「巫女姫に王国の呪術師、後は帝国の第一皇子が惚れてるあの子か。確かに多いね」

……そういえば、そのせいで仕事が増えたなぁ。
第一皇子の我が儘も面倒臭い要因だ。
エリューの恩人だから目は瞑ってあげるけど。

「……なら、僕が探すことは無理だね。世界の狭間まで探しに行けないし」
「そうねぇ。そういえば、巫女姫は王国に行っているんじゃないかしら」
「え」

また、面倒なことを。
あの国の魔術師は、かなり面倒なのに。自分から行くって。
……エリューの仕事が増えそうな気がする。

「帰るよ。エリューが傍にいないと落ち着かない」
「随分ご執着ねぇ？　失うのは恐ろしい？」

くすくすと笑う炎竜を無視し、帰る。
黒竜は最後まで僕を視界に入れなかった。
そこまで巫女姫に悪影響を与えたこと、怒ってるの？

まあ、エリュー以外はどうでもいいけど。

28－29　大樹の下で（後書き）

言い訳は活動報告に。
遅くなってすみません。

29　見上げる白

「――あれが王国の城ね。真っ白でしょう？」

アリアさんは歩きながら、遠くに見える白い城を指差して言う。
純白の城。

「凄いですね～。何で真っ白なんですか？」
「王国の色が白なのよ。帝国は逆に真っ黒だったでしょう？　歴史的に対立を続けた結果がこういう所に現れているのよ」

へ～。
仲が悪いから反対色なんだ。すっごい安直だなぁ。
でもわかりやすいからいいか。

「人の気配がしますね」
「もう少しで城下町だわ。――ほら」

アリアさんが指し示す先は木々が途切れ、民家が少し見えた。

これまた御伽噺に出てくるようなレンガ造りの家々が立ち並んでいる。

「うわぁ」
「凄いでしょう？　始めて見た時は驚いたものだわ」

お話しの中に出てくるような光景に驚く。
銀は何故かあまり機嫌がよくないらしく、その光景から目を逸らしていた。

「少し知人に用があるの。城まで行きましょうか。王子の名前を出せば中に入れると思うしね」
「え、いいんですか？」
「私も少し顔が利くのよ。王家直属と同等の契約をしているし」

にこり、と笑ってアリアさんは言う。
あのこれぞ異世界ファンタジー、なお城に入れるんですか！
帝国の城は、どちらかというと魔王城だったしね……

「……すみません、姫」
「ん？　どうしたの、銀」
「少し用ができました。すぐに行きますので先に行っておいてもらえますか？」
「うん、いいけど」

私の了承を得て、すぐに銀はどこかに行ってしまう。
用ってなんだろう。できたって言ってたけど、何もなかったのにいきなり？
まあ、思うところがあるんだろうし、いいけど。
銀との会話はアリアさんも聞いていたようで、じゃあ行きましょうか、と案内してくれる。

ん～、何か違和感があるんだけどなぁ。

29　見上げる白（後書き）

活動報告も上げておきます。
言い訳全開で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4839n/

竜の園

2011年5月16日12時33分発行